

# 弥生青銅器祭祀の展開と特質

Development and Features of the Yayoi Bronze Ritual Implements

吉田 広

YOSHIDA Hiroshi

はじめに

① 弥生青銅器の登場

② 弥生青銅器の祭器化

③ 弥生青銅器祭祀の終焉

まとめ

## 【論文要旨】

水稲農耕開始後、長時間に及んだ金属器不在の間にも、武器形石器と転用小型青銅利器という前段を経て、中期初頭に武器形青銅器が登場する。一方、前段のないまま、中期前葉に北部九州で小銅鐸が、近畿で銅鐸が登場する。近畿を中心とした地域は自らの意図で、武器形青銅器とは異なる銅鐸を選択したのである。銅鐸が音響器故に儀礼的性格を具備し祭器として一貫していくのに対し、武器形青銅器は武器の実用性と武威の威儀性の二相が混交する。しかし、北部九州周縁から外部で各種の模倣品が展開し、青銅器自体も銅剣に関部双孔が付加されるなど祭器化が進行し、北部九州でも実用性に基づく佩用が個人の威儀発揚に機能し、祭器化が受容される前提となる。各地域社会が入手した青銅器の種類と数量に基づく選択により、模倣品が多様に展開するなど、祭器化が地域毎に進行した。その到達点として中期末葉には、多様な青銅器を保有する北部九州では役割分担とも言える青銅器の分節化を図り、中広形銅矛を中心とした青銅器体系を作り上げる。対して中四国地方以東の各地は、特定の器種に特化を図り、まさに地域型と言える青銅器を成立させた。ただし、本来の機能喪失、見た目の大型化という点で武器形青銅器と銅鐸が同じ変化を辿りながら、武器形青銅器は金属光沢を放つ武威の強調、銅鐸は音響効果や金属光沢よりも文様造形性の重視と、青銅という素材に求めた祭器の性格は異なっていた。その相違を後期に継承しつつ、一方で青銅器祭祀を停止する地域が広がり、祭器素材に特化していた青銅が小型青銅器へと解放されていく。そして、新たな古墳祭祀に交替していく中で弥生青銅器の終焉を迎えるが、金属光沢と文様造形性が統合され、かつ中国王朝の威信をも帯びた銅鏡が、古墳祭祀に新たな「祭器」として継承されていくのである。

【キーワード】 弥生青銅器、祭祀、武器形青銅器、銅鐸、模倣、地域

## はじめに

弥生時代像に占める青銅器・青銅器文化の比重は大きい。新たな弥生時代像を求めつつも、弥生文化を定義しようとするとき青銅器文化像は抜きがたく、弥生文化の大きな規定要因の一つに青銅器・青銅器文化は数えなければならない。弥生時代の設定からその内容の多様性が明らかになる中で、弥生時代＝青銅器時代、弥生文化＝青銅器文化とかつてのように単純化できないながら、弥生文化が青銅器文化を含み、かつ日本列島史において、弥生文化に包摂されるべき以外の青銅器文化をみい出し難いからに他ならない。このような構造の弥生文化と青銅器文化の諸関係を整理し、弥生文化における青銅器文化の特徴的展開を明らかにするためには、弥生文化・弥生時代としながら、青銅器・青銅器文化の存在しない時間・地域の様相、すなわちそれは青銅器・青銅器文化の登場と終焉あるいは継承の様相を把握しながら、かつ存在を認める青銅器・青銅器文化の時空間的広がりの実相を認識しなければならない。

## ①……………弥生青銅器の登場

### (1) 青銅器不在の弥生時代

炭素14年代測定の進展が鉄器の再検討を導き、水稻農耕を開始しても鉄器の存在しない時代がかなり長期間にわたって存在したことが明らかとなった。では青銅器はどうか。青銅器鑄造開始年代を再検討する中で、存在を確実視できるのは、弥生時代中期初頭を待たなければならないとした〔吉田2008〕。前期末に遡る可能性をなお残すものの、現状では早期から前期は基本的に青銅器も不在の時代としなければならない。ところが、この早期から前期の間に存在した可能性を推察させる資料が、若干なりとも存在していることも無視できない。

#### 1 遼寧式銅剣転用品

転用・非転用を含めて小型青銅利器が日本列島においても少なからず存在し、これを総合的に検討してみると〔吉田2010b〕、前期に遡る可能性がある資料から、完品の武器形青銅器が登場した中期以降後期まで、さらには古墳時代にまで降る可能性のある資料すら存在した(図1)。この中で、遼寧式銅剣という本来の型式から前期に遡る可能性が高い資料として、福岡県今川遺跡出土青銅器2点と山口県井ノ山遺跡出土青銅器を指摘できる。

##### ① 今川遺跡出土青銅器

今川遺跡は福岡県津屋崎町に所在する弥生前期初頭に遡る環濠集落遺跡。まず有茎有翼形銅鏃である(図1-3)。脊は鎬が立ち、鋒付近に樋先端部がみられる。朝鮮半島出土銅鏃に形態的に近似するが、大型で脊から茎へと段をなさない、そして樋先端部の脊が幅より厚さを増す特徴から、遼寧式銅剣樋先端部付近を再加工した可能性が高い〔後藤1991等〕。板付I式期の若干新しい様相を含んだ遺物を出土したV字溝に切られた包含層下層出土で、弥生時代前期初頭前後とされている〔酒

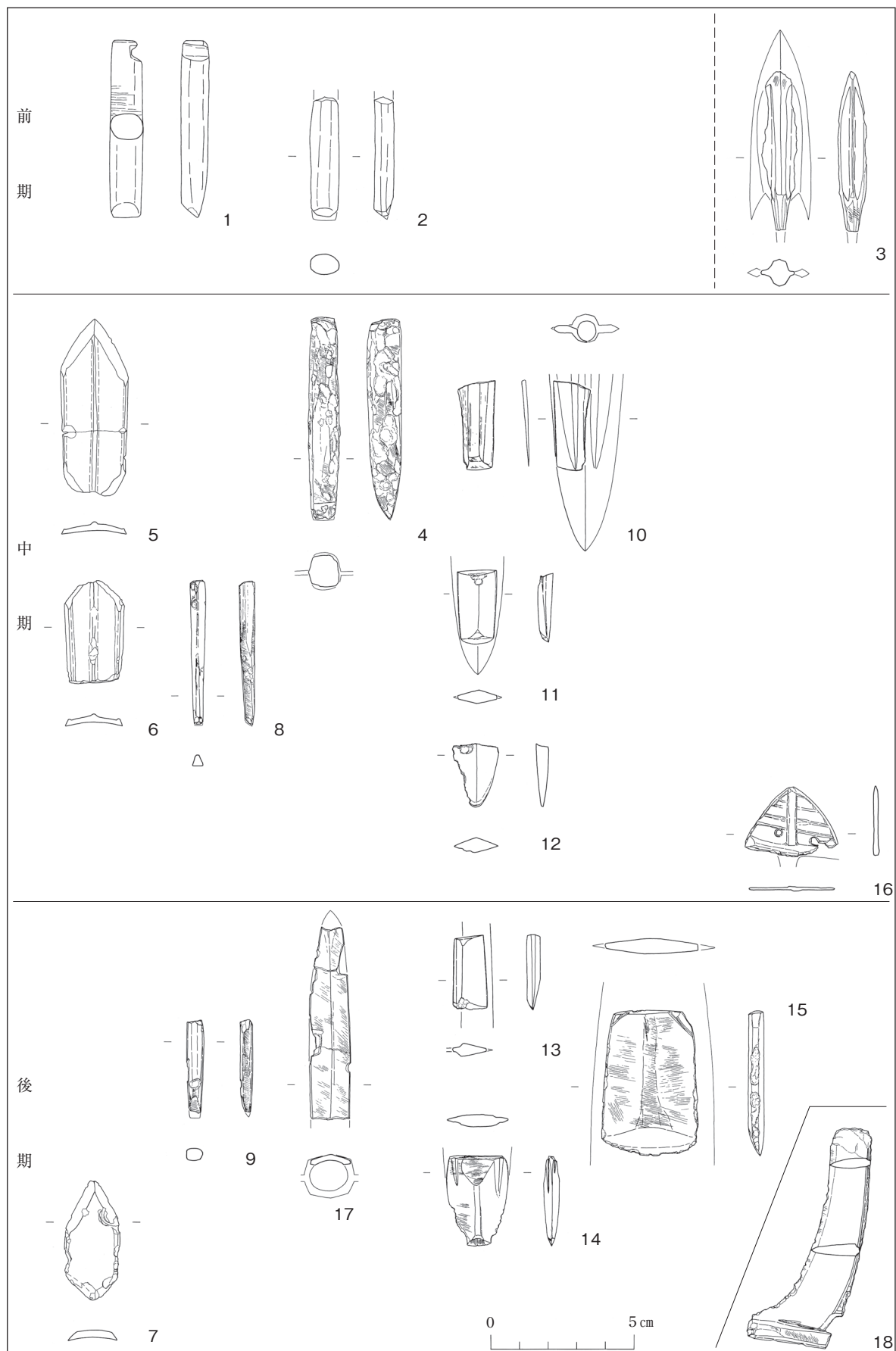


図 1 小型青銅利器の変遷

井編 1981]。もう 1 点、調査時に表採され、上記包含層下層帰属と推測されている小型円柱状片刃青銅利器がある（図 1-2）。身断面は 7～10mm の楕円形状。茎下端部に挟りを認めないものの欠損とみて、遼寧式銅剣再加工とする意見が多い〔後藤 1991 等〕。遼寧式銅剣再加工がより強く導かれる銅鏃出土と併せて、この青銅器も遼寧式銅剣転用である可能性が高い。

## ② 井ノ山遺跡出土青銅器

井ノ山遺跡は山口県防府市所在。青銅器は小型柱状片刃石斧と形態をほぼ等しくする片刃利器（図 1-4）。詳細を観察検討した結果、「脊厚が脊幅をわずかながらも上回る特徴を有した細形Ⅰ式銅剣かあるいは遼寧式銅剣の、茎から元部下半脊部を取り出して小型片刃利器に再加工した」とした〔吉田 2010b〕。現状でこのような特徴の細形銅剣が存在しないことから、遼寧式銅剣起源の可能性を積極的に評価する。しかし残念ながら、調査時の表採品で時期が定かでない〔石井編 2005〕。

## ③ 松菊里遺跡出土青銅器

遼寧式銅剣を転用再加工した事例は、朝鮮半島における存在を忠清南道松菊里遺跡にまで遡る（図 1-1）。すなわち、同遺跡出土遼寧式銅剣に特徴的な茎下端一側縁に挟りを残す円柱状の片刃青銅器の存在である〔金・安 1975、後藤 1991、柳田 2003 等〕。朝鮮半島においても転用小型青銅利器が存在し、日本列島に大陸系磨製石器を受容した時、磨製石器と同じ形態的・技術的特徴に基づいて武器形青銅器断片の小型青銅利器転用というあり方まで受容していたとみられる。

## 2 比恵遺跡出土銅剣形木製品

遼寧式銅剣に関する資料として、もう 1 点触れておかなければならないのが、福岡県比恵遺跡第 25 次調査 SK-11 出土の銅剣形木製品である。剣身部と柄部を一体に作りだし、剣身中央に脊が通って銅剣の形状をよく理解している。着柄部では剣身翼が左右とも緩やかにカーブを描いて鰐と関部が接してなく、遼寧式銅剣の着柄状態に共通する〔金 2012〕。SK-11 からは他に剣柄 1 点など多くの木器が出土し、出土土器を遺構上部および周辺出土土器も併せて検討した結果、板付Ⅱ式中段階に SK-11 の時期が求められた〔田崎・小畑 1991〕。したがって、着柄された遼寧式銅剣模倣の木製品が、前期末葉を遡って存在した可能性が高い。

## 3 三沢北中尾遺跡出土銅斧

遼寧式銅剣関連資料の他、前期に遡る青銅器資料の存在が最近報告された〔山崎 2012〕。福岡県三沢北中尾遺跡 2 b 区 127 号土坑出土銅斧である（図 2）。長方形斧 B 類〔後藤 1996〕に相当する、袋部基部付近の破片資料で、破断面も含めて二次的研磨が施され、転用の意図を推し量ることができる。出土土坑は貯蔵穴で、青銅器の詳細な出土位置は記録されていないが、出土遺物およびその取り上げ状況を再検証した結果、伴出土器は板付Ⅱ a 式新段階からⅡ b 式古段階に位置づけられ、完品武器形青銅器の初現を遡る。銅斧自体の朝鮮半島青銅器編年と、北部九州と朝鮮半島南部の土器並行関係〔武末 2004・2011〕においても、銅斧と伴出土器の組合せは順当な位置を占める。

## 4 弥生時代前期青銅器文化の可能性

今川遺跡の銅鏃、そして三沢北中尾遺跡の銅斧と、少ないながらも前期末葉を遡る青銅器資料が

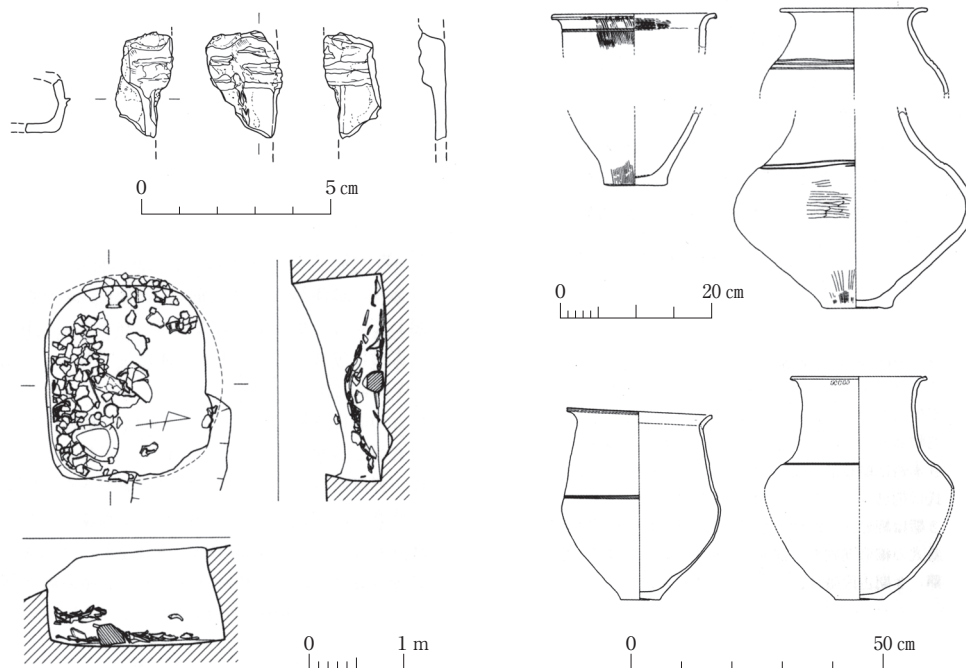


図2 三沢北中尾遺跡 2b 区 127 号土坑出土銅斧

存在する。また、比恵遺跡出土銅剣形木製品は、完品の着柄された遼寧式銅剣が存在していた可能性すら想起させる。すると、現在資料が見えただけで、弥生時代前期に青銅器が普遍的に存在していた可能性は高いのであろうか。何より、朝鮮半島では三沢北中尾銅斧と同時期に細形の武器形青銅器が出現しており、「新式の細形銅剣に、細形で無文の銅矛や銅戈が加わり、多鈕細文鏡や鉈・有肩斧・鈴類もみられる」朝鮮半島南部青銅器編年の3期古段階、中でも鑄造鉄器を伴わない前半段階〔武末 2004・2011〕に並行している。これらの青銅器が日本列島に既に流入し、一定の青銅器文化を形成していた可能性である。

銅斧そのものには二次的加工が認められ、武器形青銅器断片の転用に通じる状況が看取できる。そして、北部九州では不分明ながら、北部九州以東において武器形青銅器完品の前に武器形青銅器断片が小型利器素材として流入した段階を設定できることから〔吉田 2010b〕、北部九州すなわち日本列島への青銅器伝播最初期の地においても、小型利器素材としての青銅器断片流入段階を想定することが適当と考える。三沢北中尾銅斧と今川と井ノ山の遼寧式銅剣転用小型青銅利器は、この段階の所産とするのである。なお、武器形青銅器断片の流入は、松菊里遺跡遼寧式銅剣転用銅鑿の示す朝鮮半島南部青銅器編年第1期にまで遡る可能性があり、日本列島における完品武器形青銅器流入以前がかなりの長期に及び、細分の可能性も予想させる。

ただし、細分項目となり得るのは遼寧式銅剣に関連する資料であり、中期初頭以降に流入定着した細形銅剣と異なり、遼寧式銅剣から細形銅剣成立の時間的地域的關係性の中でとらえなければならぬ問題でもある。後続する日本列島青銅器文化への連続性を考慮したとき、現状の中期初頭における画期の評価を前期以前に遡らせることは難しく、中期初頭以降とは伝播流入した青銅器の社会的脈絡に大きな格差をみなければならぬまい。



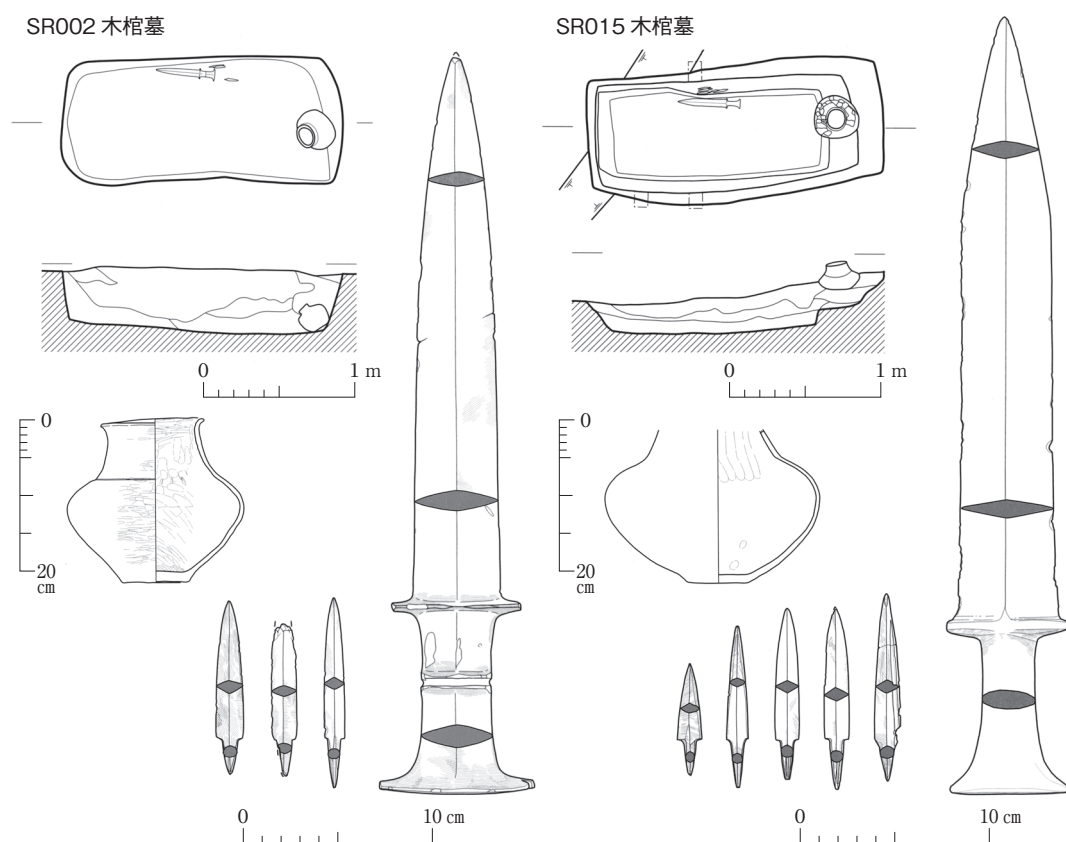


図 3 雑餉隈遺跡第 15 次調査出土磨製石剣

## (2) 武器形青銅器登場の階段

### 1 青銅器以前

比恵の銅剣形木製品に完品の存在を推察させる可能性はあるが、最初期の青銅器に武器形の全形を窺い知れるものはほとんどなく、武器形青銅器の全容は中期初頭を待たなければ明らかとならない。一方これに先んじて、武器形石製品が登場している。

日本列島において、刃部横断面菱形を呈する武器形品として最初に登場するのは、磨製石剣と磨製石鏃である。例えば、佐賀県菜畑遺跡では、夜臼Ⅱ a 式期の包含層から磨製石剣柄部片が出土し、その上位夜臼Ⅱ b 式・板付Ⅰ式期の包含層からは完品磨製石剣が出土し、磨製石鏃はさらに先んじて山の寺式・夜臼Ⅰ式期に初現している〔中島・田島編 1982〕。他の出土例も加えて、板付Ⅰ式の弥生前期を遡る弥生早期（縄文晩期末）に磨製石剣を広く確認でき〔下條 1991, 寺前 2010 等〕、先述した青銅器の存在可能性を指摘できる時期を確実に遡っている。

まず言及しておかなければならないのが、これら磨製石剣が日本列島において直に青銅器模倣した可能性、現状において青銅器そのものの存在は見いだせないが、模倣品成立を模倣対象の存在を前提とする考え方の是非である。結論から示せば、日本列島における磨製石剣の出現に、武器形青銅器そのものの存在を前提とする必要はないと考える。一つには、日本列島における武器形品の流入と完品武器形青銅器流入において、現状で時期的ずれが解消できないことである。そしていま一

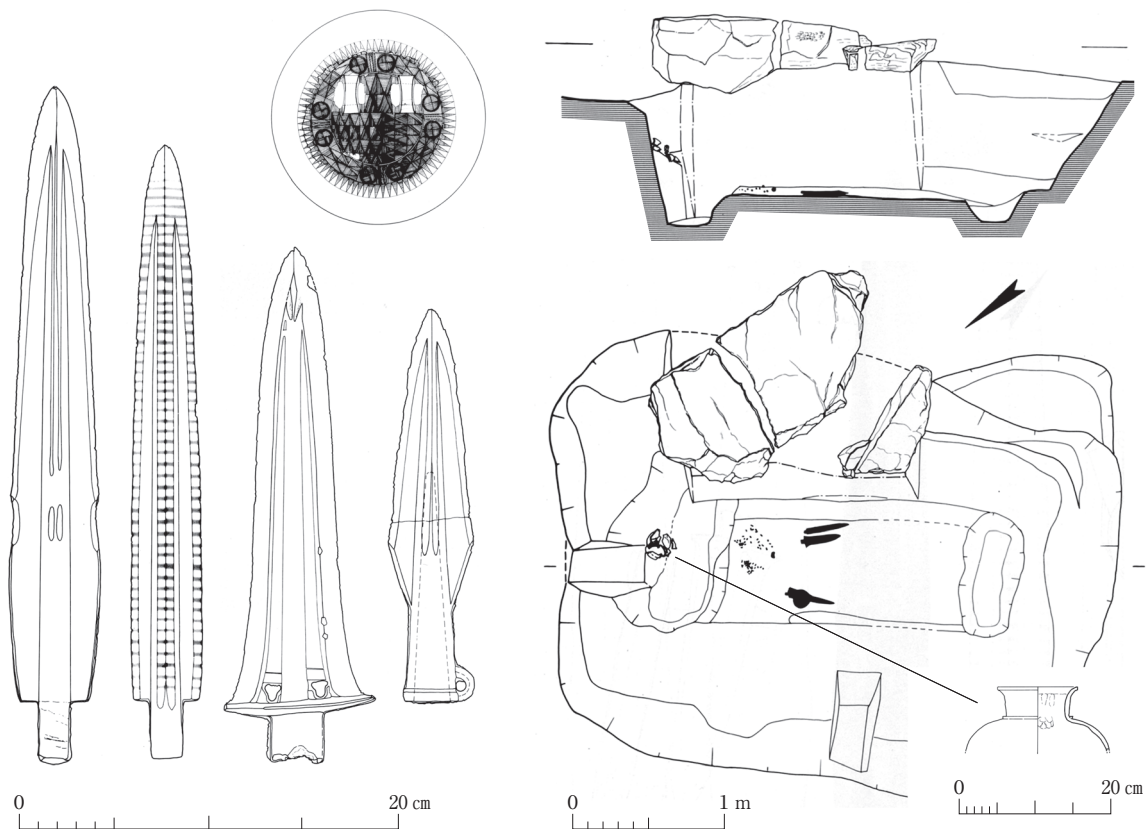


図4 吉武高木遺跡3号木棺墓出土武器形青銅器

つが、模倣関係を想定するには、磨製石剣と完品銅剣との形態差が小さくないことである。この問題は、朝鮮半島における磨製石剣の成立自体に関する問題とも共通し、東北アジアの武器形石製品を扱った特集においても、「模倣対象とされる青銅器と石製品との間の類似性が低い場合、それをどのように解釈するのか」といった課題が提起され〔庄田・寺前2012〕、「朝鮮半島の銅剣模倣石剣は模倣対象と模倣品の間の形態的類似性が総体的に低い」ことが的確に示されている〔孫2012〕。朝鮮半島におけるこのような状況を前提とするならば、その磨製石剣の影響下に出現した日本列島の磨製石剣は、既に成立定型化した武器形石製品として、武器形青銅器の普及に先んじて登場していたとすることが適切である。

菜畑遺跡等で断片であった武器形石製品の、より明確に武器形の存在を証明できる完品は、時期を明示できる出土状況の資料が多くない。そのような中で、副葬土器等を伴う初現例として弥生早期末の福岡県雑餼隈遺跡をあげることができる。雑餼隈遺跡は福岡市博多区に所在し、15次調査において該期の土坑7基、木棺墓4基が出土した。このうち、木棺墓SR003から有茎式磨製石鏃3点と夜臼式の副葬壺を伴って有節式磨製石剣1点が（図3左）、木棺墓SR015から有茎式磨製石鏃5点と夜臼式の壺を伴って一段柄式の磨製石剣1点が（図3右）、そして木棺墓SR011からも夜臼式の副葬壺とともに一段柄式の磨製石剣1点が出土している。伴出土器は弥生前期を遡り、現時点で確認できる磨製石剣副葬の最古例であり、いずれも木棺墓出土と、墓制自体も新来の木棺を採用している〔堀苑ほか2005〕。

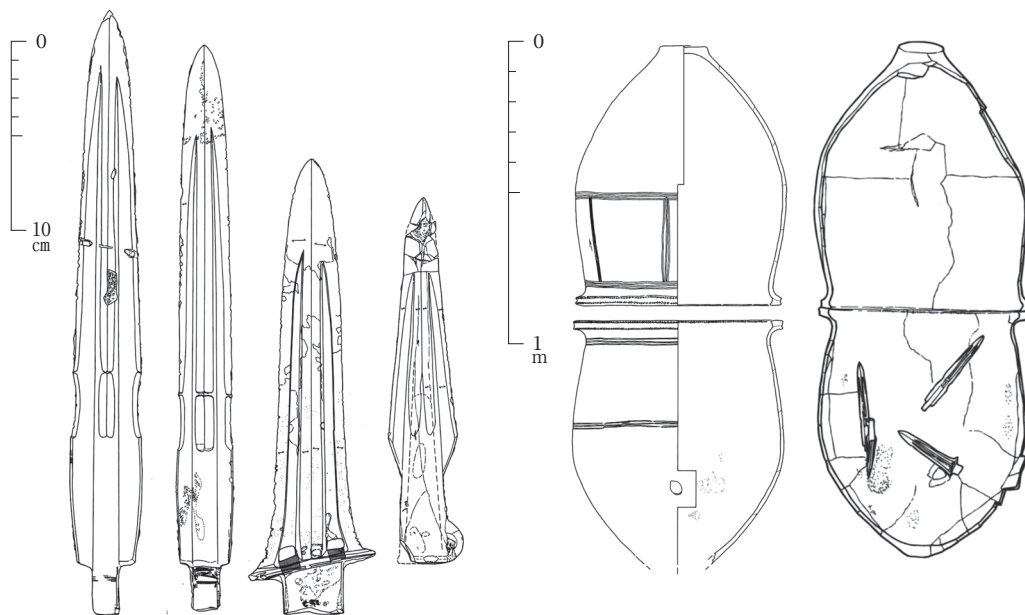


図5 馬渡・束ヶ浦遺跡 2次調査E地区2号甕棺出土武器形青銅器

以上から、日本列島においては、遼寧式銅剣関連資料の遡及可能性がある前期をさらに遡って、武器形石製品が存在すると理解できる。破片資料では夜臼式単純期に初現が認められ、磨製石鎌となるとさらに山の寺・夜臼Ⅰ式期まで遡り、武器形の全容を窺い知れる完品磨製石剣も、板付式に先行して存在したのである。炭素14年代測定による新たな年代観に基づけば、青銅器に先行した石製品のみが武器形品として存在した時間は、500年にも及ぶことになる。このような前段の存在が、後の武器形青銅器の展開に与えた影響が実は大きい。

## 2 完品武器形青銅器の登場

完品の武器形青銅器が登場するのは、弥生時代中期初頭である。北部九州の玄界灘沿岸において、金海式甕棺あるいは城ノ越式小壺を伴った埋葬遺構の副葬品としてであり、整理再確認したように[吉田2008]、かつては前期末に位置づけられてきた金海式甕棺を、伴う副葬小壺である城ノ越式が示す中期初頭に位置づけることに基づく。

登場期の様相を豊富な出土品で示すのが、福岡市早良区の吉武遺跡群である[力武・横山編1996]。中期初頭から形成された甕棺墓・木棺墓からなる墳墓群でも、特定の範囲に武器形青銅器をはじめとした副葬品の集中する墳墓が集まる。中でも吉武高木遺跡3号木棺墓では、細形2類yタイプ銅矛1点、細形Ⅱ式a1類銅戈1点、細形Ⅰ式yタイプ銅剣1点、細形Ⅳ式銅剣1点の武器形青銅器が、多鈕細文鏡1点、翡翠製勾玉1点、碧玉製管玉95点を伴って出土した(図4)。

中期初頭におけるこのような武器形青銅器の受容は、吉武遺跡群で突出して多く確認できるが、その他にも早良平野では複数の武器形青銅器出土遺跡が存在し、平野の最奥部にまで及ぶ。前期以来の拠点的な集落遺跡として板付遺跡や比恵・那珂遺跡が存在する福岡平野では、わずかに板付田端遺跡が指摘できるのに留まるのと対照的である。そして、西は宇木汲田遺跡の所在する唐津平野、



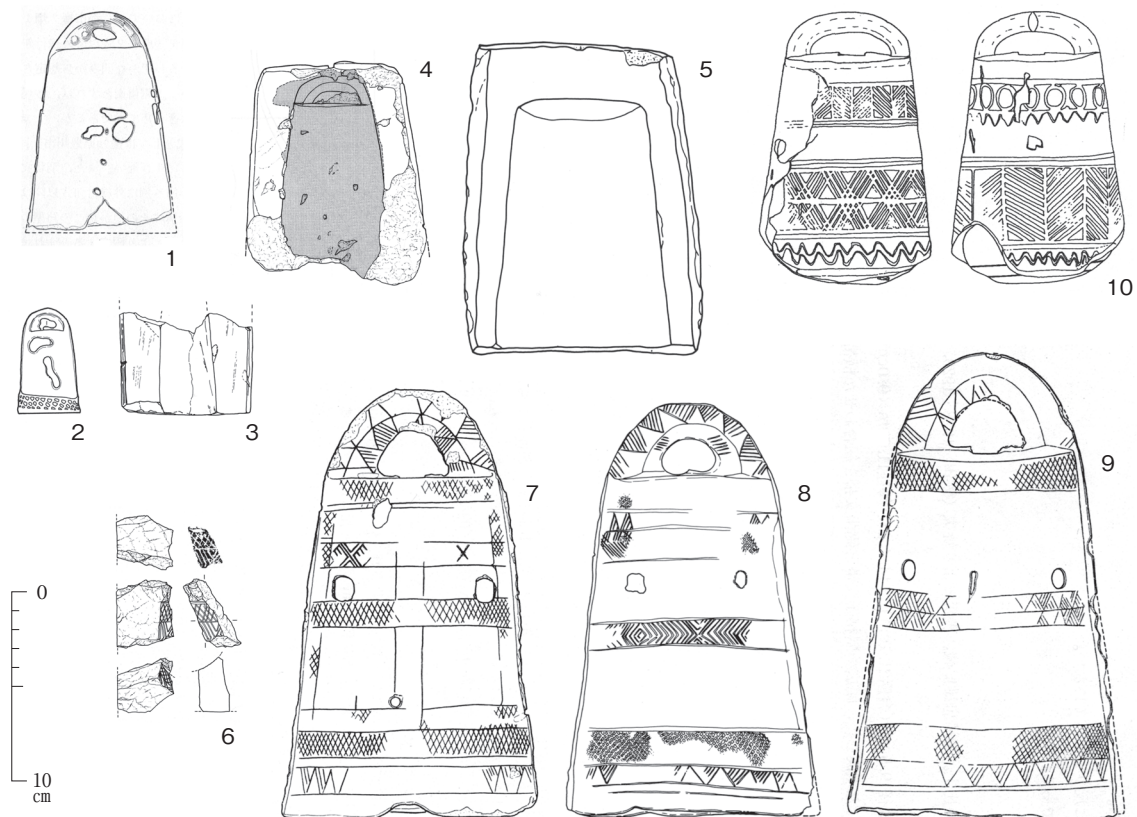


図6 銅鐸の成立関連資料

東は福岡平野の東側に隣接する古賀市域あたりまでが、金海式甕棺の分布域として甕棺から時期を押さえることのできる武器形青銅器受容範囲となる。その東端の様相は、細形2類yタイプ銅矛1点、細形I式a1類銅戈1点、細形I式xタイプ銅剣1点、細形I式yタイプ銅剣1点と、吉武高木3号木棺墓に引けをとらない内容の、馬渡・東ヶ浦遺跡2次調査E地区2号甕棺墓（図5）に、具体像を見ることができる〔井編2006〕。さらに、墓制として甕棺墓の広がりがこの段階で確認できない遠賀川流域から北九州市域、さらには関門海峡を越えた北側の響灘沿岸の一部、そして南は佐賀平野側にも武器形青銅器の受容は及び〔吉田2008〕、まさに朝鮮半島に直面した玄界灘沿岸地域を中心に、武器形青銅器受容が果たされている。

### (3) 銅鐸登場の階梯

#### 1 銅鐸の登場時期

銅鐸の出現時期も、鑄造関連資料である鑄型資料から再確認した〔吉田2008〕。型式および伴出土器から最古の時期を導き出せたのは、愛知県朝日遺跡出土鑄型（図6-6）である。斜格子文帯と綾杉文帯の一部を残す鐸身部片にあたり、文様構成と復元される大きさから菱環鈕1式に、そして伴出土器は朝日Ⅲ期と畿内第Ⅱ様式後半並行と位置づけられ〔野澤・伊藤編2006〕、中期前葉段階には銅鐸が出現していることになる。菱環鈕1式の製品は現在3点（図6-7～9）を数えるのみで、「個体差は小さいので、単独工人集団の製品であろう」とされ〔難波2006〕、かつて想定されたように、

前期末葉まで銅鐸の出現を遡らせることは難しい。つまり、銅鐸の出現は、完品武器形青銅器の登場とほぼ同じ中期前葉に位置づけられる。なお、大阪府東奈良小銅鐸（図6-10）を型式学的に菱環鈕式先行と位置づける見解〔森田2002〕もあるが、定型化した銅鐸すなわち菱環鈕式との格差は大きく、何より伴った土器が中期後半と新しく〔奥井・横山編2003〕、銅鐸の出現から定型化に直接関与したとは考えない。

近畿を中心に20cm以上の大きさで定型化した銅鐸以外に、北部九州でも小型の銅鐸が存在し、出現も遅くない。製品では、身裾に斜格子文帯をもつ福岡県原田小銅鐸（図6-2）が墳墓遺構出土で中期前半の時期に比定されている〔福島1988〕。鋳型では、福岡県松本鋳型（図6-3）が原田小銅鐸規模の大きさで、伴った土器は前期末から中期初頭〔佐藤編1998〕。近畿の銅鐸の大きさまではないが、熊本県八ノ坪鋳型（図6-4）や福岡県勝浦高原鋳型（図6-5）が中期前半には存在し〔林田編2005・井ノ上編2002〕、土製の銅鐸模倣品の存在からしても〔天本1994〕、北部九州においても中期前半には小銅鐸の一定程度の普及を捉えることができる。

## 2 銅鐸の登場以前

銅鐸および小銅鐸が弥生中期前葉に登場する前段について、武器形青銅器に先んじて、新来の武器形そのものがまず石製品として登場していたような段階が銅鐸ではあったのか。

後述するが、銅鐸模倣品は土製品が北部九州でも近畿でも展開する。ただいずれも銅鐸出現以降で、武器形の場合と異なる。何より模倣に際して土製を選択して器物外形を象ることに留まり、銅鐸あるいは小銅鐸が本来備えた金属という素材に基づく音響性は放棄されている。武器形において青銅器に先んじて石製品が登場定着できたのは、石製という素材が金属製武器の機能そのものを代替し得たからに他ならない。それ故、音響性という金属器以外で代替し難い特性をもつ銅鐸あるいは小銅鐸を、素材を異にした模倣品が、代替先行品の役割を果たすことはできなかった。

朝鮮半島南部においては、小銅鐸の他にも、音響性を伴う青銅器として、銅鈴を組み込んだ各種異形青銅器が存在する。先に述べた、日本列島に武器形青銅器3種が完品で登場する段階では、音響器の機能を有する各種青銅器が朝鮮半島青銅器文化には存在しながら、日本列島には伝わっていない。音響器の先行品が存在しないまま、音響器としての特性を帯びた小銅鐸が弥生中期に初めて日本列島にもたらされ、近畿を中心に銅鐸として独自の展開を始めたのである。

## 3 銅鐸登場の特性

北部九州への小銅鐸の登場は、武器形青銅器とともに朝鮮半島青銅器文化の海峡を越えて近接する地域への、ある意味同心円的波及として理解しやすい。ではなぜ、音響器として初めて登場した銅鐸が近畿を中心に定着したのだろうか。

菱環鈕式として成立する銅鐸は、先に触れた鋳型資料の朝日鋳型1点と製品11点を数える。出土地不詳4点を除いて、出雲2点、播磨1点、淡路1点、越前1点、伊勢1点、美濃1点そして尾張に鋳型1点となる。山陰から瀬戸内東部、北陸そして東海の広域に点在し、後の銅鐸分布の中心となる畿内地域では未出である。次の外縁付鈕式段階でも瀬戸内側にはまだ少なく、銅鐸を主体的に選択した地域は、海峡を挟んで隣接する朝鮮半島から武器形青銅器をある意味スムーズに導入し

た北部九州とはやや距離を置いて、その東側に広がっていることになる。そして、次代の近畿のような明確な核を読み取ることは難しく、広域性・散在性が特徴である。

このような分布については、先行する縄文晩期の大型粗製石棒分布圏を継承した可能性が指摘されている〔難波 2000, 中村 2004・2007, 寺前 2010 など〕。中でも寺前は、北部九州とは異なる武器形石器の展開が近畿には見られることを明らかにし、屋外樹立か両手保持の儀礼的脈絡をもつ石棒祭祀が、外来の武器形石器との折衷によって武器形の祭器化を進めたと考えた〔寺前 2010〕。石棒と武器形の折衷については、なお時間的關係から慎重を期さねばならないが、武器形石器に明らかな地域的志向が認められるとともに、屋外樹立あるいは両手保持といった石棒祭祀の公開性は、音響性あるいは造形性に基づいて当初から祭祀に用いられた銅鐸にこそ共通する。

武器形青銅器を朝鮮半島と同じ社会的脈絡の中で受容し、個人に帰した北部九州弥生社会と異なり、新素材の青銅を公開性の高い祭祀用の器種に選択しようとしたとき、武器形以外の朝鮮半島青銅器には各種工具類、銅鏡、銅鈴を組み込んだ異形青銅器、そして小銅鐸があった。ある程度大型化を見込めること、武器と異なる金属特性が発揮できることを条件とするなら、工具類や鏡、複雑な文様造形性が突出した異形青銅器類は難しく、小銅鐸の可能な範囲での大型化がほぼ唯一の選択ではなかったか。銅鐸が選ばれた理由はそのように考えることもできる。

それでも、銅鐸を確立するには、青銅器製作技術の導入と原料調達が不可避である。先に日本海沿岸の山陰・北陸から近畿そして東海という、広範な地域の連動性を指摘したが、これは経済的負荷分散に応じたものではなかったか。その中で、より朝鮮半島に近い日本海沿岸の山陰地域が小さくない役割を果たし、鳥根県荒神谷遺跡〔松本・足立編 1996〕、同加茂岩倉遺跡〔角田・山崎編 2002〕における菱環鈕式銅鐸から外縁付鈕式銅鐸までの集中を導いたと考えられる〔吉田 2012b〕。また、縄文時代以来の伝統をより残した東日本地域の一端を含み込むことで、複雑な文様や立体的造形性が銅鐸には求められることとなった。先行性は否定したものの、東奈良小銅鐸はまさにそのような関係性の中でこそ成立し得た個体であろう〔設楽 2009〕。

#### (4) 小結

北部九州では、弥生時代前期に断片的ながら青銅器の存在が認められ、さらなる広がりの可能性もなくはないが、遡って弥生前期までで、かつ中期以降の青銅器文化とは格差が大きい。しかし、水稻農耕開始以後の青銅器不在の間にも、北部九州で武器形石製品が確実に存在し、武器形青銅器受容の前に、青銅器不在の武器形実在という段階を擁し、最大山の寺・夜白Ⅰ式期にまで遡る。一方で青銅器の出土は、断片的なら弥生前期初頭まで可能性があるが、確実な完品となると弥生中期初頭を待たねばならない。炭素 14 年代測定による新たな年代観によれば、青銅器不在ながら武器形が石製品のみで存続した時間幅は、最短の弥生前期初頭まででも 200 年弱、より確実な完品武器形青銅器の出現となると、500 年にまで及ぶ。

このような武器形青銅器の登場に対し、銅鐸の出現は時期こそ弥生中期前葉と完品武器形青銅器にほとんど遅れないものの、武器形石器のようなプロトタイプを欠く。この唐突とも言える銅鐸出現の背景には、北部九州の武器形青銅器とは異なる祭器を求めた山陰から北陸、近畿そして東海といった広域の連動した選択意図を読み取らなければならない。近畿を中心とした地域は、自らの意

図で武器形青銅器とは異なる銅鐸を選択したのであり、ここに以後の弥生青銅器文化の二つの潮流が、出現当初から形成されたのである。

## ②……………弥生青銅器の祭器化

異なる前段と経緯を以て登場した武器形青銅器と銅鐸は、以後の祭器化においても異なった展開をみせていく。その具体像を形態変化や模倣品、そして社会的関係から検討していくが、まずは武器形青銅器と銅鐸が成立当初から備えた儀礼性あるいは祭祀性について整理する。

### (1) 武器形青銅器と銅鐸の祭祀性

朝鮮半島から同心円的な波及の武器形と、それを越えた背後で意図的に選択された銅鐸、それぞれの器物が実用性の一方で、登場当初から祭祀性に連なる要素を胚胎させていた。

武器形青銅器登場の前に、既に受容されていた武器形石器は、それまでの縄文文化にない、まさに武器としての形状そして機能、つまりは争いという交渉術をもった社会の成立までも導いていた。それ故に、石製品以上の鋭さをもった青銅器が登場したとき、武器としての実効性の高い武器形青銅器がすぐさま受容希求された。一方で、石製品としての先行期間が長いこともあり、実用性に裏打ちされた武器形に対する武威の観念も成熟し、新たな武器形青銅器を入手したとき、武威への観念が一層増幅されたと推察できる。つまり、武器形青銅器が登場したとき、武器の実用性と武威に発する祭祀性が既に形成されていたのである。武器形青銅器に内包された、ある意味相反する性格のいずれに比重をおき、それに応じてどう形態を変化させていくか、その対応をどのような地域的広がりの中で行っていくか、これらが武器形青銅器の祭器化の実態と把握できる。

対して銅鐸は、縄文以来の公開性の高い祭祀での使用を意図し、武器形とは異なる青銅器の特性を意識して選択されたため、成立当初から祭器として一貫していた。金属音響という使用（実用）そのものが、祭祀的行為として成立するとともに、それを除いても、大型の立体的器物として新素材である金属光沢を発する外形は、祭器としての地位を意識させるのに十分であったと推測する。祭器としての地位を貫きながら、青銅器としての特性を音響性に見いだすのか、立体的造形性に見いだすのか、それが後の銅鐸の変化を規定していくこととなる。

### (2) 武器形青銅器の変容

#### 1 北部九州における武器形青銅器の変容

完品武器形青銅器が登場してあまり時をおかず、中期前半には青銅器生産も始まる〔吉田 2008〕。その中で、なお出土製品と出土鋳型の特徴が整合的に合致しない場合もあるが、朝鮮半島とは異なる日本列島の特徴が早々に認められる。それらを一層際立たせ、結果としては武器形3種それぞれが複数の細形型式から1系譜に収斂して見た目の大型化を図ることで、朝鮮半島とは明らかに一線を画す中細形を成立させた〔吉田 2009・2011〕。その時期も中期前葉と早い〔岩永 1994 等〕。



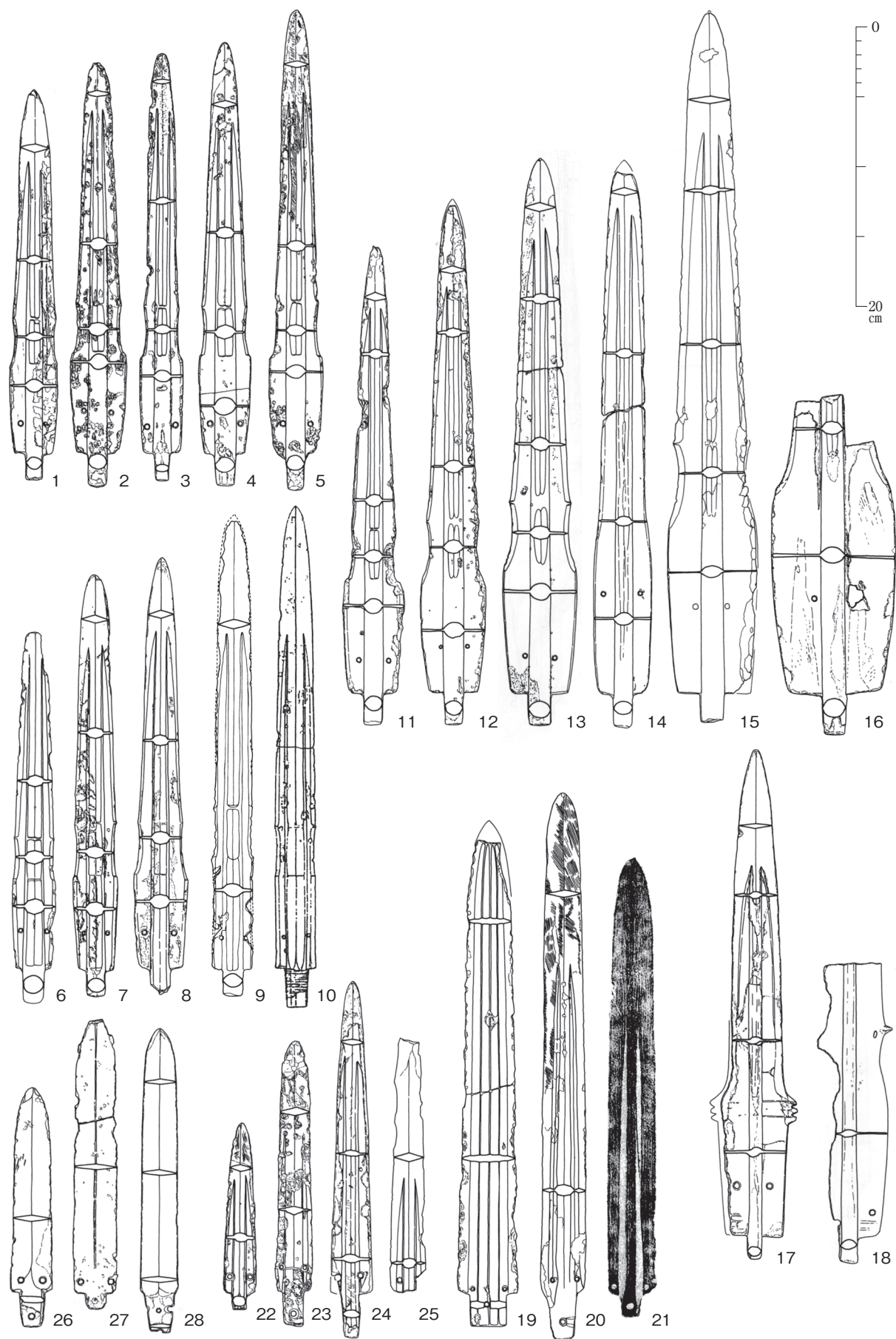


図7 関部双孔をもつ銅剣



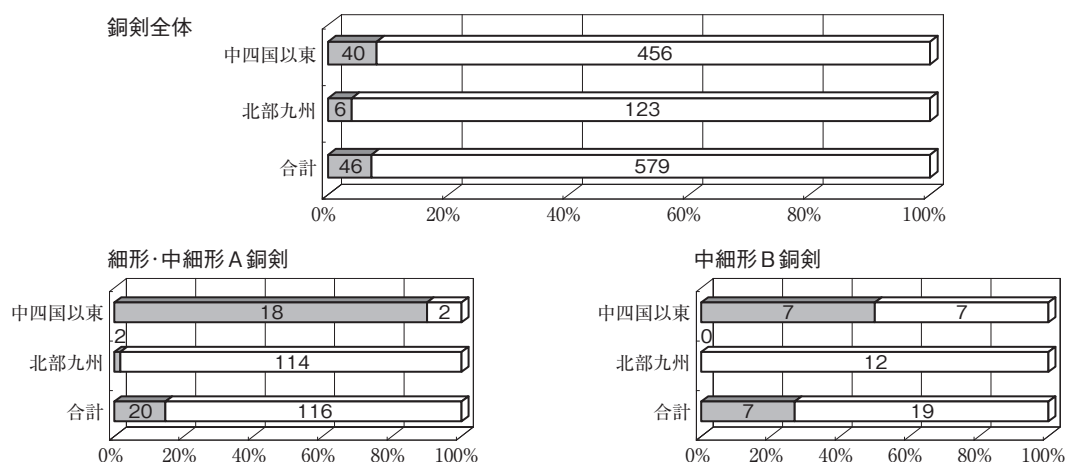


図8 関部双孔の存在比率

## 2 銅剣の関部双孔

このような列島の変容を武器形青銅器が遂げる中で、中期中葉頃から銅剣が関門海峡を東に越えて中四国地方以東にもたらされる。そうした銅剣に特徴的に認められるのが関部双孔で、武器形青銅器の変容そして祭器化を考察する上で重要な位置を占める〔吉田 2012c〕。

### ① 関部双孔銅剣の存在

関部双孔を確認できる銅剣は46点を数え、その中から28点を図7に示す。型式別にみると、細形Ⅰ式xタイプ(1～5)、細形Ⅱ式b類(6～10)、中細形A類(12)、中細形A'類(11)、中細形B類(13)、中細形BC類(14)、中細形C類(15)、中細形D類(16)、平形Ⅰ式c類(17)、東部瀬戸内系平形Ⅰ式(18)、多樋式(19)、深樋式(20・21)、細形・中細形再加工(22～25)、鉄剣形(26～28)と、多様な型式の銅剣に広く存在していることがわかる。一方で、関部双孔をもつ銅剣の多くが関門海峡を越えた中四国地方以東で出土していることも特徴で、北部九州出土は46点中の6点でしかない。

### ② 関部双孔の存在率

上述した関部双孔をもつ銅剣46点であるが、その存在率はどの程度か(図8)。銅剣総数は遺漏もあるが、関部双孔の有無を確認できた総数は625点。すると銅剣全体に占める関部双孔をもつ銅剣は、7.4%でしかない。ただし、銅剣総数に占める荒神谷銅剣358本(うち関部双孔を塞いだ2例を含む)を除くと、関部双孔をもつ銅剣は総数267点中の44点16.5%にまで率は上がる。一方、上述した関門海峡の東西で分けてみると、北部九州で129点中の6点4.7%、中四国地方以東で496点中の40点8.1%。荒神谷銅剣を除くと、中四国地方では138点中の38点27.5%と格段に比率が上がる(図8上)。

さらに型式別に見てみると、一層地域差が際立つ。再加工を除く細形・中細形銅剣で関部双孔をもつ銅剣は20点確認できるが、このうち2点のみが北部九州出土で、他の18点が中四国地方以東出土。中四国地方以東出土で関部双孔の有無を確認できる20点中の18点90%に達し、関部双孔が中四国地方以東の細形銅剣において必須に近い装置となっていることがわかる(図8下左)。中

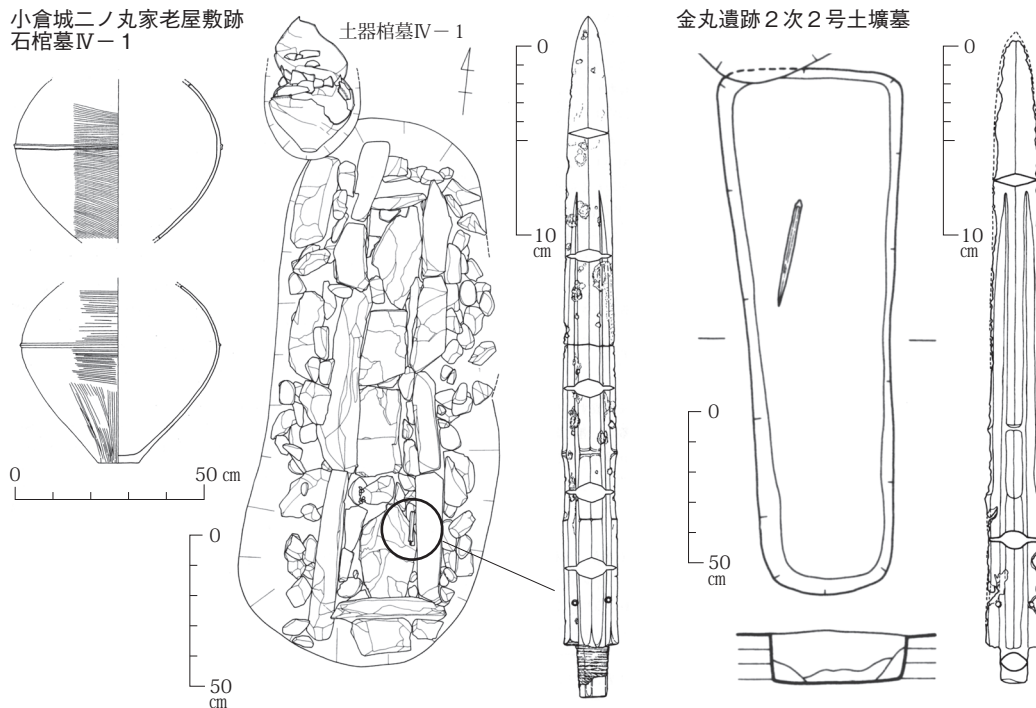


図9 北部九州の関部双孔をもつ細形銅剣

細形B類銅剣でも14点中7点50%に下がるものの、なお比率は高く、北部九州における12点中0点と明確な対照をなす(図8下右)。さらに、中四国地方以東に分布が限られる中細形B C類銅剣は、関部双孔の存在率がきわめて高い[吉田2005]。他方、北部九州出土の関部双孔をもつ銅剣は6点で、茎にもう1孔を穿つ多樋式1点が中期末葉、深樋式1点と細形再加工1点、中細形再加工1点は後期に降る。残る2点が、中四国地方以東でも通例の細形銅剣で、関部双孔出現期の資料として重要な地位を占める。

### ③ 関部双孔の初現

細形銅剣関部双孔は中四国地方以東に展開し、基本的に北部九州では存在しないとみられてきたが、近年北部九州圏で2例の出土をみた。しかも時期を絞りこむことができ、関部双孔の出現について重要な情報を提供している。北九州市小倉城二ノ丸家老屋敷跡(以下、小倉城下層)銅剣(図7-10)と遠賀町金丸遺跡銅剣(図7-9)である。

小倉城下層では石棺墓Ⅳ-1から関部双孔銅剣が出土した[高山編2012]。石棺内頭位側小口近くの側壁に接するような位置に、2点に破断されて重ねて副葬されるという、破砕副葬の興味深い事例でもある[吉田2012c]。銅剣は細形Ⅱ式b類で、剣身長33.4cmと長手でかつ細身。朝鮮半島出土のよく研ぎ込まれて細身となった銅剣を想起させる。茎表面には、着柄に伴って巻かれたとみられる大麻の紐が残る。石棺墓そのものに時期を明示する副葬品はないが、石棺墓を切るⅣ-1土器棺墓が中期初頭であり、それ以前に位置づけられる(図9左)。金丸遺跡2次調査2号土墳墓からも関部双孔をもつ細形銅剣が出土している[武田編2007]。同じく細形Ⅱ式b類で、剣身長32.5cmを測り、やはり細身である。土墳墓は他に遺物を伴わず遺構の切り合い関係もなく、周辺の遺構や

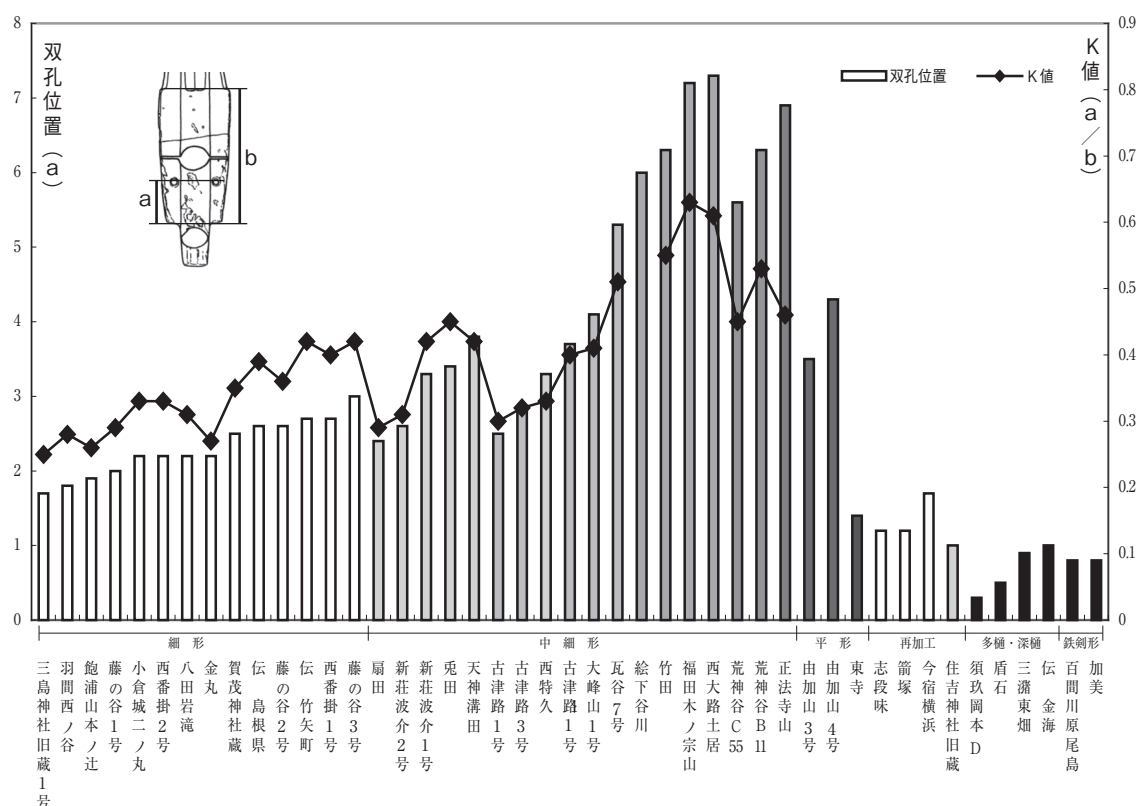


図10 関部双孔の位置

遺跡から、中期初頭から前半の時間幅に想定されている（図9右）。

以上の新出2例から、北部九州の玄界灘沿岸でもやや東に偏った地域で、中期初頭から前葉には銅剣関部双孔の出現を確認できる。関門海峡以東の関部双孔銅剣がいずれも埋納とみられる出土状況で時期を特定できないこと、関部双孔銅剣の模倣品が中期中葉より遡らないことから、銅剣関部双孔の初現は、北部九州玄界灘沿岸の東部地域における中期初頭から前葉に求めることができる。

#### ④ 関部双孔の機能

このようなあり方を示す銅剣の関部双孔の機能については、種々の意見が提起されてきたが、孔周辺の使用痕が明確でなく、直接的証左を求められなかった。そこで、これまでも指摘されていた関部双孔位置の変化について〔岩永1986等〕、詳細の検討を行った〔吉田2012c〕。まず、関部から孔芯までの左右平均距離（双孔位置）と、双孔位置を関部から刳方下端までの距離（刳方下端位置）で除した数値（K値）を型式ごとに示す（図10）。細形の最低位置1.7cmから中細形の最高位置としてBC類西大路土居の7.3cmまで、剣身長大型化に伴った低位置から高位置への変化が、双孔位置とK値で確認できる。中細形BC類をピークに若干下がるものの、中細形C類、D類、そして中細形B類から派生する平形I式も比較的高い位置を保ち、関部双孔は剣身長大型化に伴って高位置化するという傾向を読み取ることができる。

これと別に、低位置関部双孔として現れるのが、中期末葉の多樋式、後期の深樋式や鉄剣形、さらには細形・中細形の再加工例である。最高で細形銅剣最低位置程度で、双孔位置1cm以下のもの

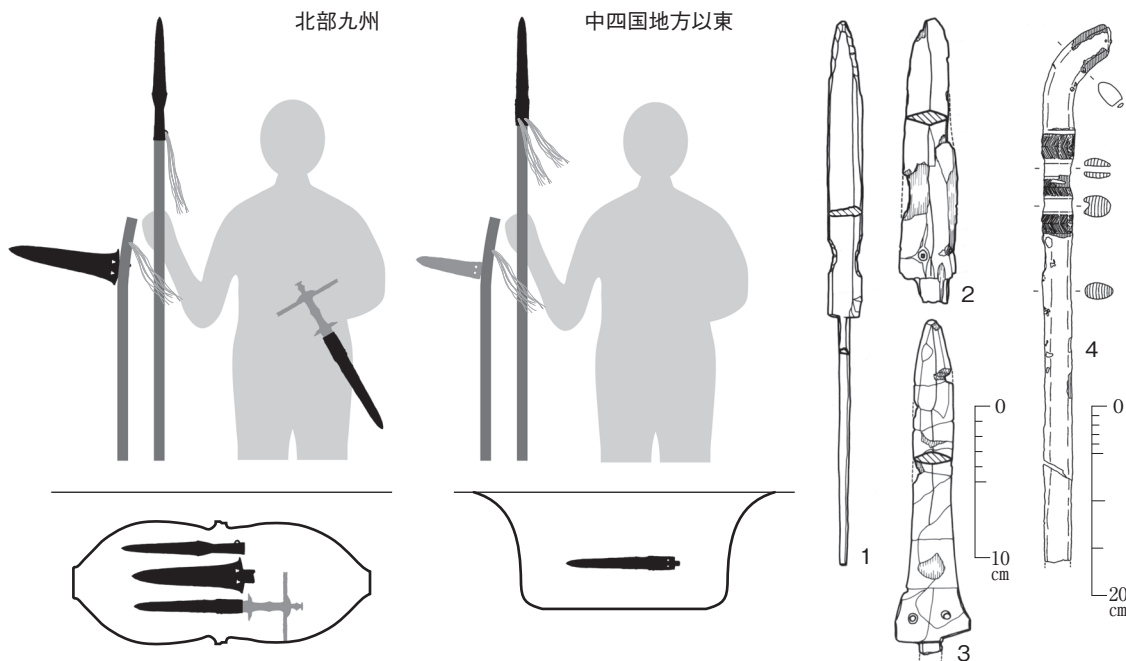


図 11 細形武器形青銅器の用法模式図と関連資料

が多い。この中の須玖岡本D地点の多樋式銅剣（図7-19）は、茎部と関部双孔位置を含んだ下端が木質をわずかに残して銚具合が異なり、関部双孔と茎の1孔を着柄の際の目釘孔としたことが窺える〔境 2004〕。鉄剣形銅剣では、関部双孔付近で中央鑄や刃部研ぎ出しの消失がみられ、関部双孔周辺が刃部として意識されていない場合もある。これらから、深樋式他の低位置関部双孔は、関部自体を覆うようにして着柄するための目釘孔と理解できる。

着柄に実用的な低位置関部双孔に対して、細形から中細形を中心とした高位置関部双孔は、目釘孔としての着柄には明らかに不向きである。着柄痕跡もなく、関部双孔位置に刃研ぎを行う細形Ⅱ式b類も少なくない。着柄を意図せず、孔に直接的な負荷があまりかからない用法を想定すると、布帛あるいは紐など吹き流し状の装飾付加装置とすることが最も適当であろう。

### 3 武器形青銅器取り扱いの二相

銅剣関部双孔を吹き流し状の装飾付加装置とすると、そこには銅剣の着柄・佩用をめぐる異なる取り扱いが生じていることになり、大きくは北部九州と中四国地方以東という地域性となっている。その二相について、具体的に言及する。

まず、本来の武器としての取り扱いを保った北部九州においては、銅剣は茎を介在させて柄に装着され、使用時には腰に佩用されていた。銅矛は長柄に装着されるが、一方で装飾的装置として銅矛本体に半環状の耳があり、吹き流し状の装飾が推定できる。同じく長柄に紐等着柄された銅戈も、緊縛の紐とともに別途柄に装飾付加装置の付く場合が、実際の木柄出土例から知ることができる（図11-4）。甕棺を中心とした埋葬施設に副葬品として収められる場合は、実用時の着柄をある程度保ちつつ、一部柄を外すあるいは短くするなどしていたとみられる。こういった状況が、北部

九州における中期中頃までの武器形青銅器の扱われ方である（図11左）。

対する中四国地方以東では、銅矛・銅戈の完品はほとんどもたらされていない。ただ、新たな着柄技術を伴う戈自体の普及は確認でき〔寺前2010〕、ここでは模倣品として戈の存在を示し、着柄および装飾は北部九州の銅戈と同じとした。武器形の中で最も普及した銅剣は、上述した関部双孔が穿たれ、吹き流し状の装飾付加装置が加わる。そのような装飾を効果的とするためには、腰に佩用していたのでは目立たない。何より、銅剣本来の短柄への着柄と相反する。公開性の高い祭器としての使用を意図して銅鐸を成立せしめた地域にあっては、やはり操作者の身体から可能な限り離れることが求められ、本来的な長柄装着の銅矛欠落もあって、長柄に装着する方法を選択したとする。唯一的に関部双孔の表現をもたないが、山口県宮ヶ久保遺跡銅剣形木製品〔村岡編1998〕の茎を延長したかのような形態（図11-1）は、長柄に取り付けられた銅剣を模した可能性が高い。小倉城下層銅剣の分析〔吉田2012c〕では、短柄用の茎紐巻きと装飾付加装置である関部双孔の共存としたが、茎紐巻きを長柄用とみなすのである。限定された将来品の武器形青銅器である銅剣を長柄に装着し、吹き流しなどの装飾を付加し、共同体において多くの成員が集まる公開性の高い場面での使用に供されていた様子を復元するところであり、それが最終的には埋納という祭祀によって地に埋められる。このような武器形青銅器の取り扱い方が、中期中頃の中四国地方以東には広がっていたのである（図11右）。

### （3）青銅器模倣品の展開

青銅器祭祀の展開を語る上で、青銅器自体の稀少さを補って立体的言及を可能とするのが模倣品である。これまで、器種毎の論考はそれぞれ豊かな研究蓄積を誇るが、青銅器祭祀全体を俯瞰し、かつ器種間の模倣のあり方について比較検討した論考は多くない〔熱田ほか2007〕。これに対して吉田は、北部九州と中四国地方以東に分けて各器種そして素材毎に模倣のあり方の大枠（表1・2）を提示し〔吉田2002〕、各器種について地域を細分しながら模倣の地域性を概述し〔吉田2004〕、さらに各器種間の模倣のあり方の差違にまで論及した〔吉田2011〕。これら模倣品のあり方を、青銅器・青銅器文化の各地域への広がりにもなう青銅器祭祀の地域性・在地性として、改めて様相を整理する。まずは器種毎の模倣の概要、そして特徴的な地域単位での叙述とする。

#### 1 各青銅器の模倣

##### ① 銅矛模倣品

銅矛の模倣品は少ない。北部九州では、ミニチュアとでも言うべき製品（熊本県白藤）と鑄型（白藤、佐賀県土生）があるのみ。中空の袋部と半環状の耳をもち中細形以前の銅矛を意識しているが、あくまで青銅製で他の模倣品とは性格を異にする。中四国地方以東でも、近畿地域での石製品3例（奈良県唐古・鍵、兵庫県家島、京都府日置）のみである。中空袋部と半環状耳を意識し、模倣対象は中細形以前、大きさは青銅器にほぼ等しい〔吉田1997〕。

##### ② 銅戈模倣品

銅戈の模倣は、下條により詳細が検討され、内の退化すなわち着柄の形骸化に基づいて九州型石戈A→Ba→Bb→Ca→Cbの変化が描き出された〔下條1976・1982a〕。一方、これまで「石矛」



表 1 北部九州の青銅器模倣

		石	木	土	銅
銅 矛	○	×	×	×	△
銅 戈	○	○	×	×	×
銅 剣	○	×	△	×	×
銅鐸(小)	○	×	×	○	—

○は定量存在、△は少量存在、×は存在せず

表 2 中四国地方以東の青銅器模倣

		石	木	土	銅
銅 矛	△	△	×	×	×
銅 戈	○	○	○	△	×
銅 剣	○	○	○	△	×
銅 鐸	○	△	×	○	○

○は定量存在、△は少量存在、×は存在せず

とされてきた大型木葉形の武器形石器〔下條 1982b〕について寺前は、目釘を用いた戈としての装着を明らかとし、これを目釘式石戈、従前の石戈を有胡式とした〔寺前 2010〕。以下、銅戈形石製品を有胡式と目釘式に大別し、有胡式の細別は下條の分類により有胡式 Ba 等、目釘式の細別は寺前の分類に基づき目釘式 A 等とする。

北部九州では樋の表現のない有胡式が、中期初頭から中期後葉の時間幅で、やや東に分布を偏らせつつ安定して展開する。当初は着柄可能な内に発し、中期初頭という出現時期からも、模倣対象は細形銅戈である。模倣に際した大きさの変化は極端でなく、石材は現状で白色系のものが選択されている。副葬品としての出土例を確認できるが、後半は青銅器同様に非実用的な色合いが強まり、埋納を推察させる場合もある〔下條 1982a 等〕。

中四国地方以東にも北部九州の無樋の有胡式石製品が点在する一方で、近畿地域を中心に、銅剣形と同様の黒色系石材を用いた有樋の有胡式石製品が存在し、近畿型銅戈を対象とした模倣が想定できる。他方、目釘式石製品は、近畿で戈身を打製サヌカイトに置換するなど、青銅器模倣の枠を超え、戈という有用な新来武器として操作術を含めた機能的な側面での受容が窺える〔寺前 2010〕。このような受容を背景にしてこそ、青銅器および青銅器模倣品としての戈が、ある意味銅剣以上の広がりをもちえたと言える。

その最東例が、北信地域を中心に上越・西毛地域に及ぶ中部高地への銅戈到達と、同地での銅戈模倣である。有胡式石製品の有樋・無樋が混在し、胡幅によれば本来は銅戈とあまり変わらない大きさである。ところが、鋒が斧刃状に研ぎ減り寸詰まるという特徴が多々見られ〔馬場 2008 等〕、同様の特徴は長野県柳沢銅戈にも認められた〔廣田編 2012, 吉田 2012a〕。また、樋内に鋸歯文を有する銅戈形土製品の出土もみられる（新潟県吹上）。

石製品のように特定の範囲に集中展開はしないが、銅戈形木製品は広い分布を示す。石製模倣が卓越する北部九州と中部高地を除き、西は山陰西部・瀬戸内中部地域から、近畿・北陸・東海地域に広がる。戈自体の広範な受容にともない、鉄戈の影響（山口県宮ヶ久保）や特大型の存在（岡山県南方）など、模倣の様相は多様である。

### ③ 銅剣模倣品

銅剣模倣品は北部九州に少なく、積極的に銅剣模倣の展開を認める見解もあるが〔寺前 2012〕、中四国地方以東で広く存在・展開する模倣品との格差を評価しておきたい。

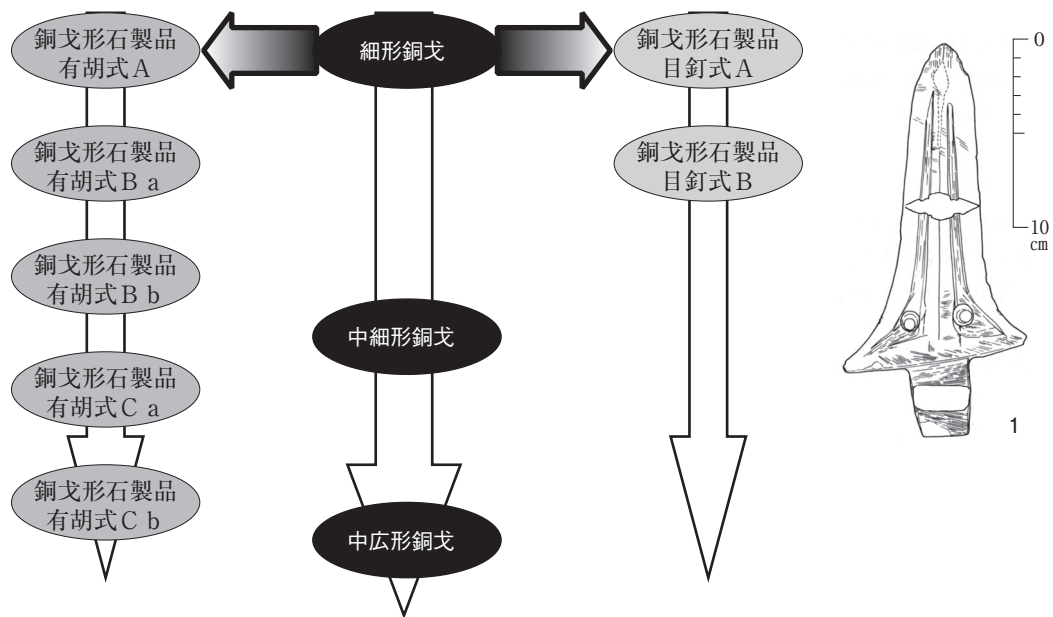


図12 北部九州の銅戈模倣

まず、近畿から北陸地域では、黒色系石材による銅剣形石製品が広がる。銅剣の水平な翼の作出が形骸化することに着目し、水平な翼が表現されるⅠ式から溝状の樋の表現に留まるⅡ式、そして樋の表現を消失して関部双孔のみの表現となるⅢ式への変化が示されている〔種定1990・1992〕。模倣に際してxタイプの研ぎが踏襲され、対象は細形Ⅰ式xタイプから中細形A類で、模倣に伴う大きさの変化も大きくはない。存続幅は中期中葉～後葉。他方、山陰地域や南四国地域でもそれぞれ石製模倣があり、近畿でも中細形B類銅剣を模倣した石製品（京都府東土川）が単独存在する。各地で石製模倣が展開する中で、銅剣形木製品も各地に認められる。そのうち、立体的に精巧な模倣を行うA式と扁平板状のB式があり、B式は小型のB1式と大型のB2式に分けられる〔寺前2010〕。瀬戸内地域では石製品が稀で、替わって遺存の容易でない木製品が卓越し（岡山県南方、香川県多肥松林）、土製品も認められる（香川県矢ノ塚）。しかも円柱状の脊を表現するA式があり、模倣はより忠実である。山陰東部地域でも鯨骨製の精巧な模倣品が存在し（鳥取県青谷上寺地）、各地各様の模倣をみることができる。

#### ④ 銅鐸模倣品

銅鐸分布圏内における銅鐸模倣品として、銅製品、土製品、石製品が存在する。広範な銅鐸分布圏において銅鐸の土製模倣が通例的ともみえるものの粗密があり、近畿北半にほとんど存在しない、東海地方で後期に多くなるなど、地域・時期・量、そして模倣の質などの差が存在する〔大野2004、神尾2012、黒沢2012等〕。とりわけ、各模倣品間の個体差が大きく、地域毎に特徴的な模倣品の形状等を抽出することは難しい。銅製品も、銅鐸形ということで一括りとする中に、銅鐸模倣品だけでなく小銅鐸模倣品あるいは銅鐸起源に関わるものを含む可能性があり、単純でない。また、小型ながら青銅器製作技術を要することから、一定範囲の共通性を見出すことはできるが〔富樫・徳沢1995等〕、銅鐸における銅鐸群のような型式的まとまりまでは見いだせない。

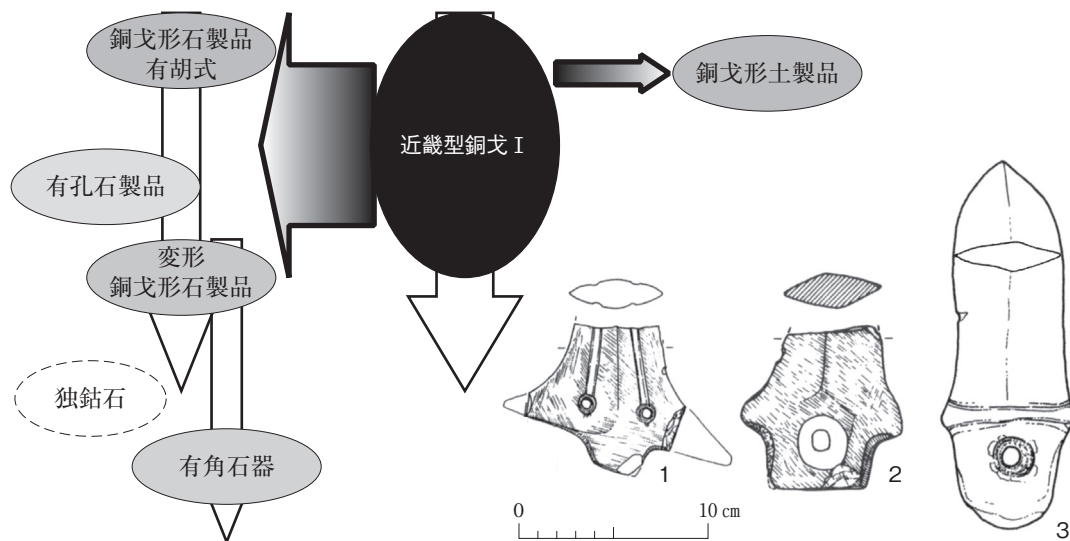


図 13 中部高地の銅戈模倣

他方、銅鐸分布圏外の北部九州でも、銅鐸形土製品がまとまって存在し、朝鮮式小銅鐸、小銅鐸、さらには福田型等の九州産銅鐸の模倣品混在を想定でき、ここでも土製品は形態の多様性に富む[天本 1994]。そして、銅鐸分布圏外東側の関東地方に、時期を古墳時代初頭まで降らせながら、小銅鐸が広がっている[比田井 2001 等]。

## 2 青銅器模倣の地域的展開

青銅器模倣は器種毎に差違が確認できるとともに、そのあり方自体が地域単位で生じていた。以下、一定地域単位での模倣について、青銅器・青銅器文化の受容に対する各地域の直接的反応とみて、日本列島内部で青銅器文化が展開・定着し、在地化していく様として詳細を検討する。

### ① 北部九州の銅戈模倣

北部九州の銅戈模倣は、最初期には有樋も確認されるが(図 12-1)、細形銅戈から、樋の表現を省略し外形とそれに基づく着柄方法を忠実に模倣した無樋有胡式銅戈形石製品が中期初頭に登場する。そして、着柄形骸化に基づく型式組列をなして、中期の時間幅の中で展開した。目釘式も出現するが、着柄および操作術という機能的側面に特化し、青銅器外形の模倣度合いは低い。

無樋有胡式銅戈形石製品は、成立こそ細形銅戈からの模倣を契機とするが、その後の安定した型式組列は、模倣品自体で完結している。着柄の形骸化と儀器化・祭器化では銅戈と銅戈形石製品が変化の方向を一致させながら、鋒幅増大などの見た目の大型化を進めた銅戈に応じた、銅戈形石製品の外形変化は全く見られない。実際の銅戈形石製品の製作にあたって、石庖丁などとともに専門的な石器製作工房での製作を示す例があり(福岡県辻田)、特定の製作集団の存在が窺える。つまり、模倣に端を発しながら、その後は銅戈と距離をおいて、特定の製作集団により独自の形態維持を図っていた様子が窺える。したがって、銅戈と銅戈形石製品が緊密な関係を保ちながら、同じ祭器として重層的に機能した状況を想定することは難しい(図 12)。

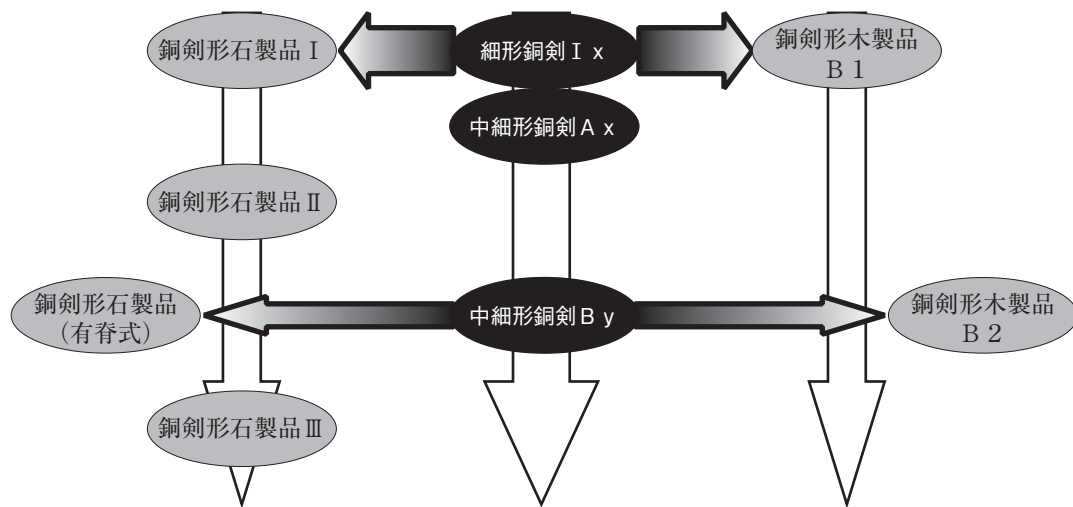


図 14 近畿の銅剣模倣

## ② 中部高地の銅戈模倣

中部高地に近畿型銅戈Ⅰ式がもたらされる中期中葉以降、これを契機に石製品による銅戈模倣が始まる。有樋有胡式（図 13-1）が多いが無樋も混在し、北部九州ほどの定型化、型式組列の安定性は窺い難い。むしろ、銅戈形石製品から変形銅戈形石製品に変化する段階で、石材が変質輝緑岩に集約され、製作集落（長野県榎田）も特定される状況が指摘されている〔馬場 2008〕。変形銅戈形石製品の最初期には、胡の張り出しという銅戈外形を残して内に円孔を穿つ石製品（図 13-2）があり、その後に胡の張り出しを弱めた石製品（図 13-3）が登場する。この系譜の延長に、胡が身から直交に張り出し、内が柄状に長大化あるいは柄に着柄された様子を取り込むかしたとすれば、有角石器をも位置づけられる〔石川 1992〕。有角石器の最古段階には胡の盛り上がりと樋の凹みを残す例（千葉県草刈）があり、銅戈からの影響が模倣品の変容過程においても不断に継続していたことを窺える。その中には、縄文系の独鈷石等からの系譜を取り込んだ可能性も考慮されてよい〔岡本 1999〕。そして、このことと対応するように、銅戈を頂点に、模倣品を下位におく保有集団および祭祀の階層性が、中部高地においては指摘されており〔町田 1997a・1997b〕、銅戈を頂点とした各種模倣品による祭器の階層化が図られていたと考えられる（図 13）。

## ③ 近畿の銅剣模倣

近畿においては銅剣形石製品がⅠ式からⅡ式・Ⅲ式へと、模倣品自体の製作工程省略という形で型式組列を組むことができた。明確な製作工房でないものの未製品出土遺跡（京都府神足）もあり、北部九州の銅戈形石製品と同じく、特定の製作集団の存在が想定できる〔種定 1990・1992〕。また、最初に細形銅剣ないし中細形 A 類銅剣から銅剣形石製品Ⅰ式が模倣された後は、見た目の大型化という銅剣の変化から独立していることも、北部九州の銅戈模倣に一致する。新式の中細形 B 類 y タイプ銅剣を新たに模倣した石製品も存在したが、最初に円柱状の脊を作り出す有脊式とも言える特徴から、従前の銅剣形石製品Ⅰ式・Ⅱ式とは製作工程が異なり、一連の模倣品組列に載らない、現時点で派生個体である。木製品も、立体的な銅剣形木製品 A 式を欠き、扁平板状な銅剣形木製品 B 1

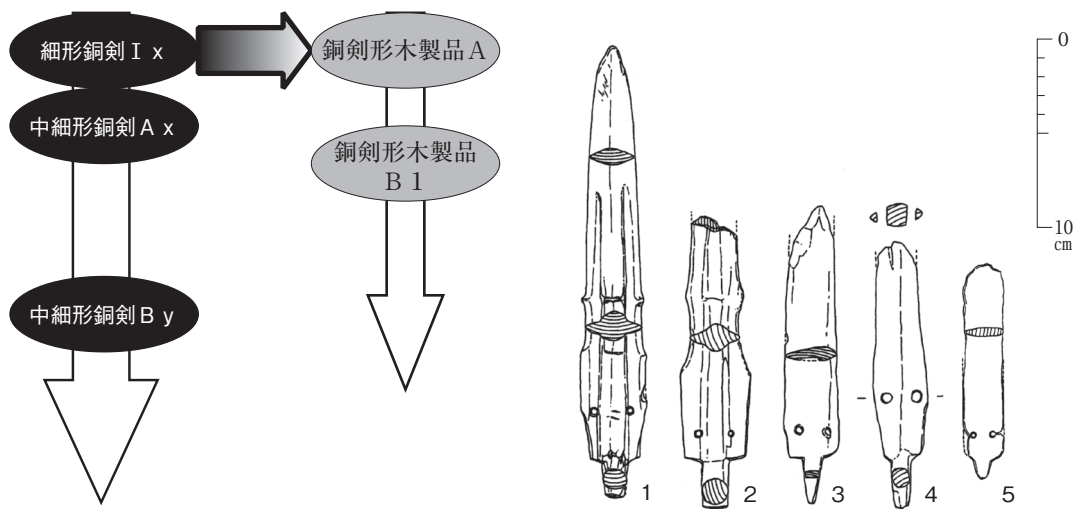


図 15 瀬戸内の銅剣模倣

式があるのみで、中細形B類yタイプ模倣が想定できる扁平板状の銅剣形木製品B2式も派生個体である。近畿の銅剣模倣も、成立以後に青銅器と距離をおきつつ展開しており、同じ祭祀の中で素材を違った祭器が重層的な役割を果たした姿は、とりわけ石製品には想定し難い(図14)。

#### ④ 瀬戸内の銅剣模倣

近畿における銅剣の石製模倣に対し、瀬戸内中部地域では銅剣の木製模倣が卓越する。しかもここでは、脊を円柱状に作り銅剣と同じ段差を表現するなど、立体的かつ精巧な銅剣形木製品A式が存在する(図15-1・2)。一方で扁平板状のB1式も同時並存し(図15-3～5)、木製によって多様な模倣度を成立させている(図15)。同じ状況は、鯨骨製品による模倣の山陰東部地域にも見いだせる。精巧な銅剣模倣が達成されているだけに、銅剣そのものの存在が強く推察され、かつ多様な程度の模倣品を存在させる状況は、これに応じた祭祀の重層化が想定されてもよい。ただそれも、中期中葉の一時に過ぎず、その後に銅剣および銅剣模倣品が継続した様子は窺えない。

#### ⑤ 近畿の銅鐸模倣

銅鐸模倣については、先に多様な状況に触れるに留めた。銅鐸形土製品を扱った論考でも、基本的に銅鐸と形態の類似度を個体毎に判断し、その度合いの分類に終始せざるを得ない状況にある。例えば、大野は銅鐸と共通する形態的特徴の有無に基づく銅鐸模倣品の認定を行い[大野2004]、神尾は土製品の形態分類とともに、「パースペクティブ(乖離度)」を基準に検討し[神尾2012]、黒沢はより直裁的に、「銅鐸に忠実」という視点で模倣文様の有無を最上位に判断する[黒沢2012]。つまり、銅戈形石製品や銅剣形石製品が、それ自体で型式組列を組める状況とは大きく異なる。このことが、銅鐸形土製品の模倣を考察するとき、最も重要な点である。

忠実な模倣も確かにあるが、総じて高い文様や形態の逸脱は、何より土製という可塑性の高い、そして要する技術の最も安易な素材選択に応じ、同時に模倣に際しての縮尺率がかなり大きい。ここに、模倣品を専門に製作する集団を想定する必要はない。銅鐸に直面した個人ないしは少人数の集団が、その個別体験に基づいて模倣を行った姿こそ浮かび上がる。もちろん、模倣行為あるいは



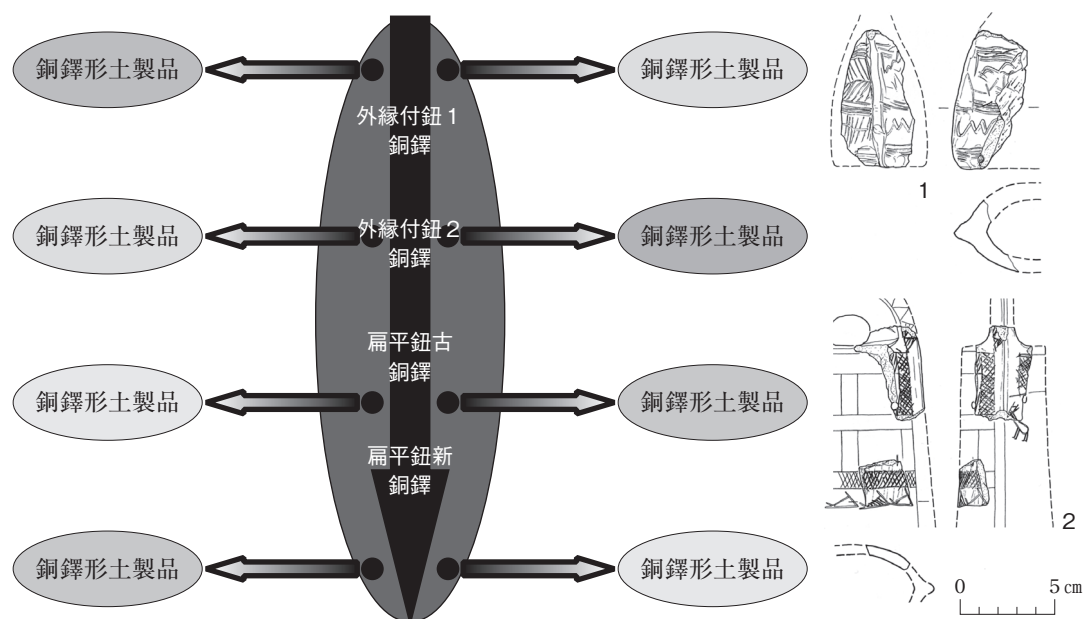


図16 近畿の銅鐸模倣

その容認について、より大きな集団内での共有（流行）はあろうが、模倣品自体はそのような社会的共有物にはなり得ていない。ある意味、最も個人レベルに近い祭祀行為の浸透、在地化として、銅鐸祭祀の重層性（あるいは底辺拡大といった方が適切だろうか）をみることはできるが、一過性が強いとも推測できる（図16）。なお、後期に銅鐸形土製品が盛行する東海地域では、土製品間にも組列が想定され〔黒沢2012〕、模倣の増加もあり、土製品まで含み込んだ社会的関係性が広がっていた可能性がある。

### 3 青銅器模倣の特性

青銅器各器種、そして特徴的な模倣品が展開する5地域を取り上げて青銅器模倣について論じた。まず何より、地域によって選択される模倣対象の相違がある。流入青銅器の種類・量に応じて、選択肢がそれぞれの地域で異なり、かつ地域での志向性が加わり、模倣品の地域性が形成されたのである。そうしたとき、北部九州での模倣の低調さは余計に目立つ。豊富な青銅器をもつが故に、敢えて素材を違えてまで模倣を行う必要がなかったのであろうか。稀少な流入青銅器に対応した中四国地方以東と、豊富な青銅器を有する北部九州の差が見え隠れする。

模倣という行為により、模倣対象と模倣品がその取り扱いも含めて重層性を達成していると予測されたが、実際はそう単純でない。模倣品自体が製作集団の手により確立し、青銅器から離れて独自の変化を辿った北部九州の銅戈形石製品や近畿の銅剣形石製品は、青銅器との重層的关系を想定することが難しい。むしろ、やはり少ない青銅器流入に応じ、多様な模倣程度を生み出した瀬戸内地域の銅剣木製模倣や、中部高地での銅戈形の範疇を超えて展開する多様な形態を生み出した銅戈の石製模倣などこそ、器物と祭祀の重層化が指摘されてよい。そして、重層性は認められながらも、土製を専らとした、きわめて個人レベルに近い行為としての銅鐸模倣は、他の青銅器模倣とは社会

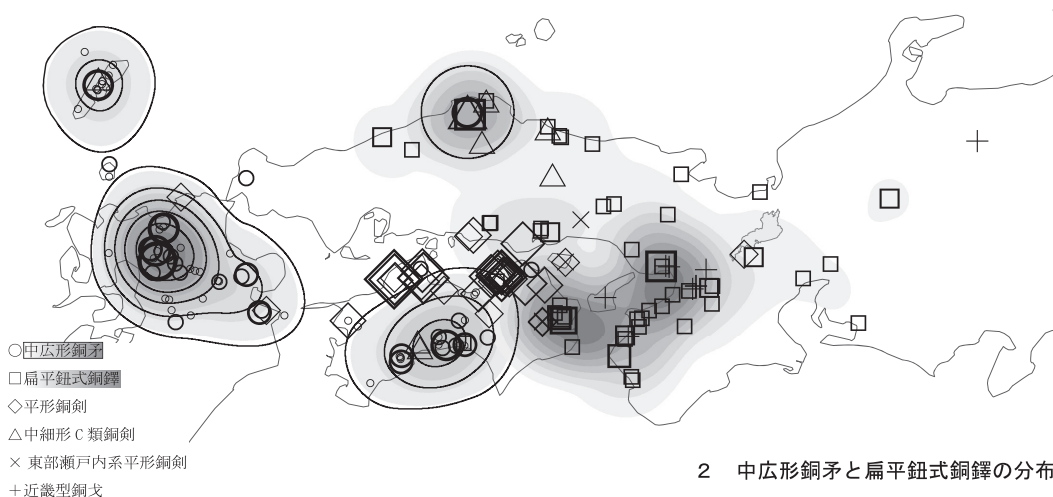
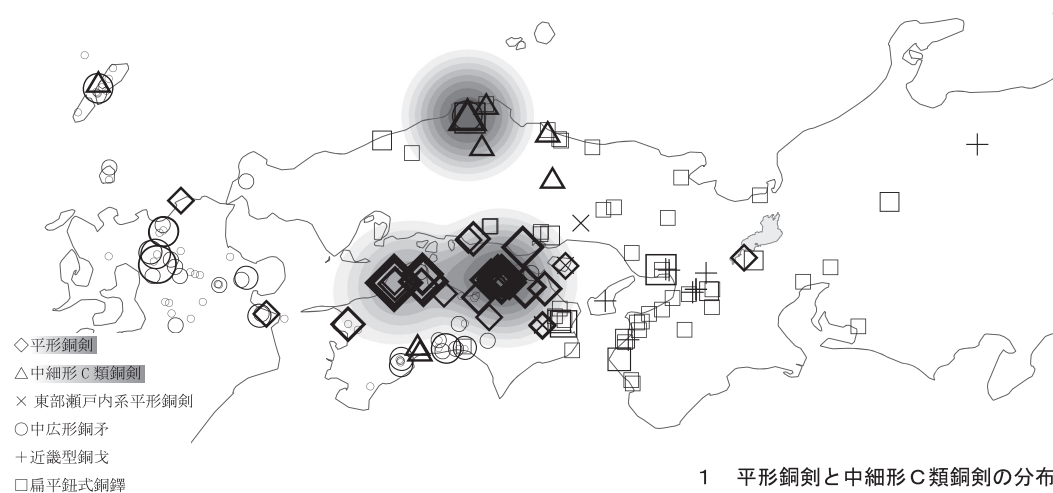


図 17 中期末葉の青銅器分布の対峙

的位置付けを異にしなければならない。

#### (4) 地域型青銅器の確立

青銅器そのものの列島範囲での広がりに伴い、各地に多様なあるいは特定の青銅器が広がり、それらに対する在地化といった意味で、各種青銅器模倣が展開していた。このような中で中期末葉には、特定地域を分布域とする地域型青銅器が登場する。

##### 1 地域型青銅器の分布

中期末葉には西日本を中心に地域を分割するように、青銅器分布圏が割拠するような状況となる。中広形銅矛、中広形銅戈、中細形C類銅剣、平形銅剣、東部瀬戸内系平形銅剣、近畿型銅戈Ⅱ・Ⅲ式、そして扁平鈕式銅鐸の青銅器分布である [吉田ほか 2008]。まず、中細形C類銅剣と平形銅剣は、密度分布の高まりも、また出土遺跡自体も重なることがほとんどなく、前者が出雲地域、後者が瀬

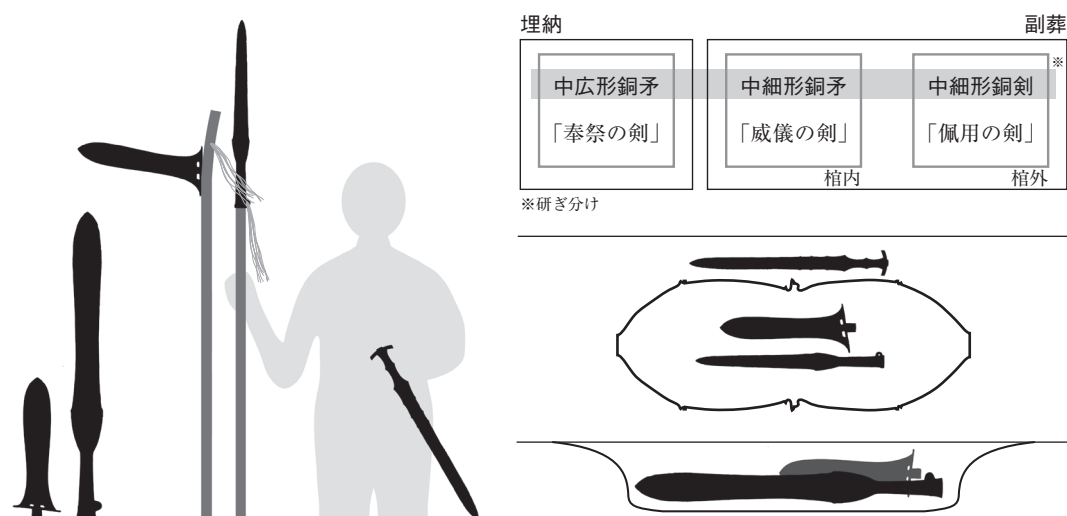


図18 北部九州中期末葉の武器形青銅器の分節化

戸内南岸地域に分布域を形成する。平形銅剣分布域の東側には、東部瀬戸内系平形銅剣と近畿型銅戈Ⅱ・Ⅲ式が分布して一定の分布域をもつが、出土点数は少ない（図17-1）。一方、西側では、春日丘陵に一大青銅器生産拠点が形成され、そこで製作された中広形銅矛が北部九州から広がりを見せる。まず対馬に高い密度分布を示し、東の豊後地域から豊予海峡を渡って南四国地域へ広がり、荒神谷遺跡により出雲地域でも一極が存在する。対して東側の近畿を中心とした地域では、畿内地域と東四国地域を中心に扁平鈕式銅鐸の密度分布が高まる（図17-2）。

## 2 地域型青銅器と弥生社会

分布で際だった特徴を見せる青銅器が、それぞれ地域社会でどのように位置づけられていたのか、北部九州と瀬戸内、そして出雲を検討の俎上に載せる。

### ① 北部九州における青銅器の分節化

北部九州における武器形祭器として広がるのは中広形銅矛であるが、同じく祭器に中広形銅戈があり、甕棺には中細形銅矛や中細形銅剣の副葬が続く。このような青銅器のありかたを分節化としてかつて整理した〔吉田2002〕。すなわち、北部九州における最高位の祭器として中広形銅矛、その下位に中広形銅戈がある。最終的に埋納される武器形青銅祭器であり、「奉祭の剣」と表現した。一方、中期末葉の王墓では、中細形銅矛や中細形銅戈が副葬される。副葬以前は、長柄に装着され保持者の権威を高めた「威儀の剣」である。そして、銅剣の中でも特異な形態を示し、特別に入手あるいは創出された可能性の高い、多樋式銅剣や中細形A'類銅剣、中細形Ⅱ式銅剣が副葬品に加わる。ただし、棺外副葬の場合があるなど、扱いは一段低い。被葬者が生前身に帯びた「佩用の剣」と位置づけた。三者は刃部の研ぎ分け技法を共有する場合もあり、王墓を頂点とした副葬と祭器としての埋納という最終的に埋められる場面での使い分けと、それ以前の使い分けが、中期末葉の北部九州には厳然と成立していたのである（図18）。ただ、その分節化の頂点の地位は、自ら製作した武器形青銅器でなく、中国王朝の威信・観念を纏った大型前漢鏡が占めていた。

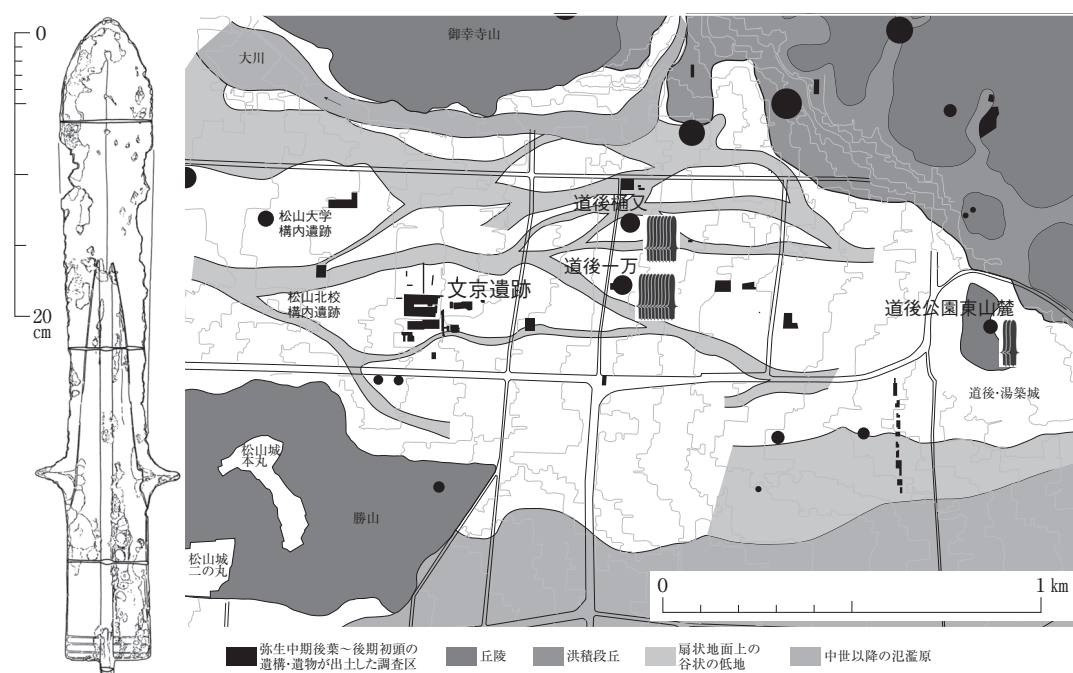


図 19 文京遺跡と平形銅剣

## ② 平形銅剣と文京遺跡

多用な青銅器の分節化に対し、中四国地方以東の地域では、1 器種に特化する方法を採用した。瀬戸内南岸地域では平形銅剣である。密度分布では瀬戸内南岸でも讃岐地域に高いが、中広形銅矛や扁平鈕式銅鐸など平形銅剣以外の青銅器と混在し、扁平鈕式銅鐸と平形銅剣の共伴例（香川県羽方西ノ谷）もある〔吉田 2004〕。対して、松山平野では平形銅剣 22 点が、平野北端の道後城北地域の半径 1km 内外に集中し、かつその範囲に他の青銅器はみられない。松山道後城北地域において平形銅剣は、局所的・排他的に分布するのである。

そして、この道後城北の中期末葉には、文京遺跡が存在する。大型掘立柱建物や周溝遺構を中心とした中枢域、密集居住域、高床倉庫の集中する貯蔵域、そして諸生産活動が想定できる生産域と集落内に機能別配置がみられ、銅鏡や鑄造鉄斧などの舶載品をはじめとした多用な交流を窺わせる出土品をもち、青銅器生産の存在も考慮される、地域弥生社会の核たる大規模密集型集落である〔広瀬 1998, 田崎 2006, 柴田 2009 等〕。集落至近の埋納地（一万・伝樋又）は、いずれも大型掘立柱建物から東に 500 m 程度しか離れてない（図 19）。墳墓を介して特定個人の姿を浮かび上がらせることはできないが、平形銅剣の祭祀あるいは生産までもが、大規模集落を中心とした地域弥生社会の構造に包摂され、地域型青銅器が地域弥生社会の形成を象徴かつ維持する重要な機能を果たしていたのである。

## ③ 荒神谷遺跡の大量埋納

一括大量埋納された荒神谷遺跡の 358 本もの中細形 C 類銅剣は、剣身長 50cm 前後という、おそらく切り出し時に既に規格化された鋳型石材を用いることにより、突起位置を変更することで銅剣プロポーションの変異を生み出し（図 20 上段）、同じ突起位置でも元部外形や脊の厚みに変化を生



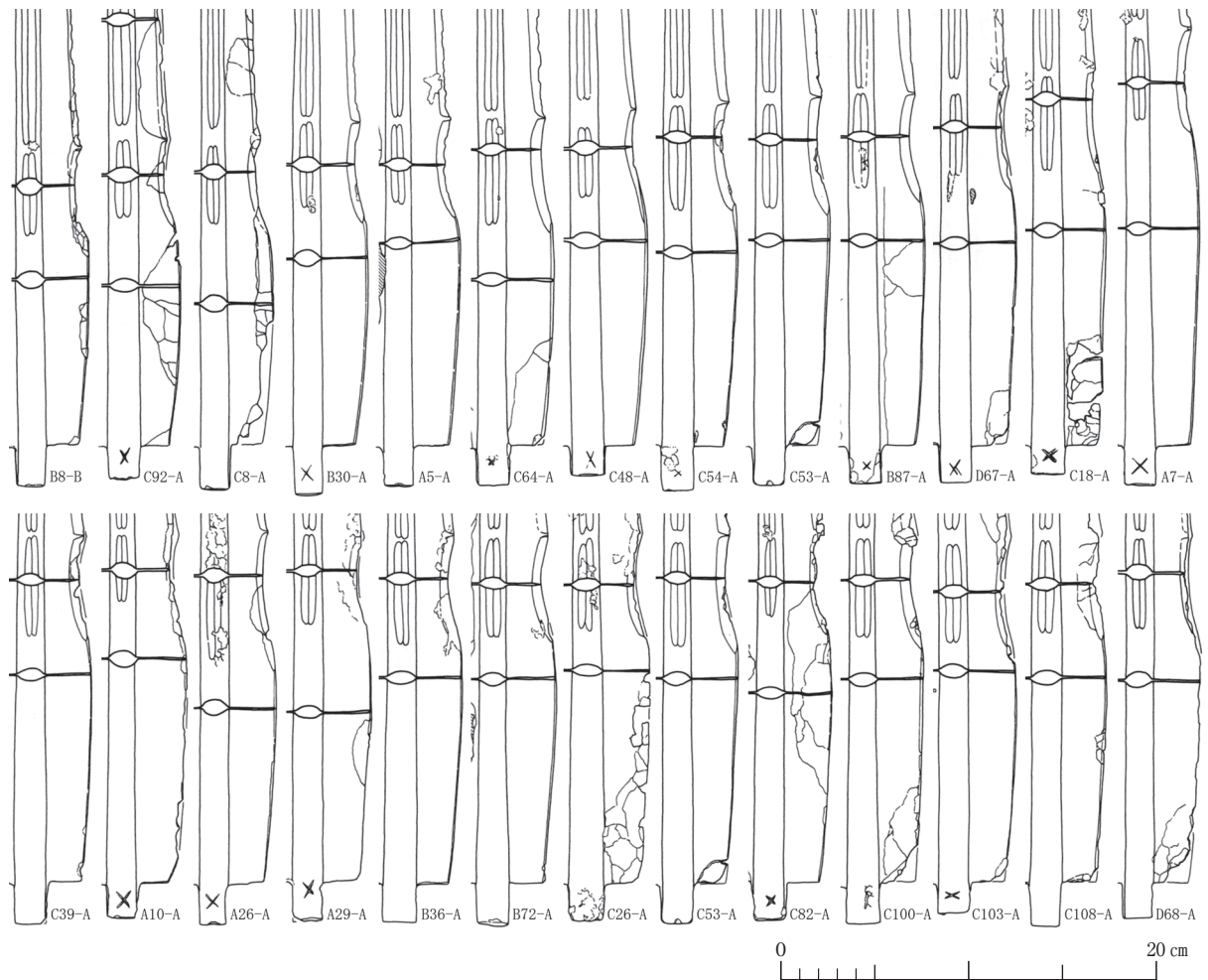


図20 荒神谷出土銅剣の変異（上段：突起位置の変異，下段：同突起位置内の変異）

じさせてさらなる変異がみられた（図20下段）。同範関係をも見いだせた，このような資料群は，一括製作された状態を保ったまま，おそらく短時間のうちに一括埋納されたと強く推察された[松本・足立編1996]。そして，荒神谷と同時製作ではないものの，同じ中細形C類に位置づけられる銅剣が出雲から伯耆地域にかけて分布する。鋳型の出土をみていないものの，一括製作の姿を保ったままの荒神谷遺跡における大量埋納と，出雲地域を中心とした分布から，中細形C類銅剣を出雲で製作された地域型青銅器と位置づけるところである。

青銅器自体からの分析に終始し，地域弥生社会との関係が不明なままであったが，模倣品を通して，その関係を推測できる資料が島根県田和山遺跡にある。田和山遺跡は，3重環濠という一見防御性の強い集落と見られるが，その内側の狭い山頂部には，「柵によって圍繞された空間に目隠しの柵を伴った9本柱遺構のみが存在」とするという特異な景観をなし[落合編2005]，むしろ祭祀的な色彩を強く読み取らなければならない。この遺跡で銅剣形石製品が出土しているが，関部双孔の欠如や円柱状の脊の作出，そして大きさから，中細形C類銅剣模倣とできる。つまり，特殊な遺構配置をもつ田和山の地で祭祀が執行されたとき，荒神谷に大量埋納される中細形C類銅剣を象った



表 3 武器形青銅器の同範製作比率

青銅器			出土数 (a)	鋳型数 (b)	同範組数 (c)	平均鋳造数 (d : a/b)	同範組比率 (e : c/b)
器種	型式	遺跡					
銅戈	中細形B類	隈・西小田	23	22	1	1.045	5%
	中細形B類	住吉神社	6	6	0	1	0%
	中細形B類	隈・西小田 + 住吉神社	29	26	2	1.115	8%
	中細形B類	牛尾神社	2	2	0	1	0%
	中細形C類	原町	43	42	1	1.024	2%
	近畿型I式	山地	6	5	1	1.2	20%
	近畿型I式	柳沢	7	6	1	1.167	17%
銅剣	中細形C類	神庭荒神谷	296	226	43	1.31	19%
銅矛	中広形	神庭荒神谷	13	13	0	1	0%
			13	12	1	1.083	8%
	中広形	目達原	4	4	0	1	0%
	中広形	検見谷	12	11	1	1.091	9%
	中広形	目達原 + 検見谷	16	14	1	1.143	7%
			6	6	0	1	0%
	中広形	バンジャク	6	5	1	1.2	20%
			7	7	0	1	0%
	広形	坊主山	7	6	1	1.167	17%
			8	8	0	1	0%

神庭荒神谷・バンジャク・坊主山の下段は、彫り直しの可能性を算入した場合

銅剣形石剣が用いられた情景を復元でき、出雲における中細形C類銅剣祭祀の浸透、それも青銅器と青銅器模倣品という重層化を遂げた様子を指摘することができる [吉田 2012b]。

## (5) 銅鐸の変容

銅鐸の祭器としての地位は、金属器のもつ音響性と文様をもった立体物としての造形性に依拠していたとした。この祭器たる特性が、中期後葉前後から実は変容していく。手がかりは、同範品のあり方などの製作技術である。

### 1 武器形青銅器の同範関係

武器として鋳造後に研ぎが加えられる武器形青銅器にあつては、同範関係の抽出はほぼ不可能であると考えられてきた。しかし、358本という大量資料と、ほとんど研ぎを加えていないB62号銅剣ほか、研磨工程各段階の痕跡が豊富に見いだせ、研ぎによる造形と鋳造による造形の峻別を明確にできた荒神谷銅剣の分析では、358本中の296本で、最大5本の同範組を見いだせ、鋳型数で226個の鋳型、1鋳型平均の鋳造本数は  $296/226 \div 1.31$  本と算定された [松本・足立編 1996]。武器形青銅器同範関係初めての認定であり、この値がどのような意味をもつのか、正直大量生産の割に同範品製作による省力化はあまり達成できていないのではないかと感じつつも、さらなる分析を経ることとした。鋳出し鑄の銅戈や銅矛に分析を広げ、さらに一部その後の検討例も加えてまとめたのが表3である。同型式大量出土遺跡を中心に新たに扱った資料でも、平均鋳造本数は最大でも1.2。それも彫り直しの可能性を含めた数値で、荒神谷をいずれも下回っている。実見による詳細未検討の資料を探索しても、明らかに同範でないことが見いだせる場合が圧倒的に多く、武器形青銅器における同範は決して多くないと予測されるに到った [柳浦ほか 2004]。武器形青銅器の石製鋳型使用は、同範品製作による省力化を意図したものではないことになる。

表 4 銅鐸の同範作成比率と鑄造技術

		総組数 (a)	同範組数 (c)	推定同範組数 (c')	同範組比率 (e ; c+c' /b)
菱環鈕式		10	0	2	20%
外縁付鈕 1 式	四区袈裟襷文	25	10	7	68%
	流水文	7	3	2	71%
外縁付鈕 2 式	流水文	13	8	1	69%
扁平鈕式古段階	二区流水文	3	1	1	67%
	一区流水文	4	1	0	25%
	石井谷型	10	1	1	20%
		同範組比率	文様鑄出	鑄掛け	補刻
菱環鈕式		20%	不鮮明有	少数	なし
外縁付鈕 1 式		70%	不鮮明有	少数	なし
外縁付鈕 2 式		70%	鮮明化	多用	多用
扁平鈕式古段階		70 ~ 20%	鮮明化	多用	多用
扁平鈕式新段階		例外的	鮮明化	多用	多用
突線鈕 1 式		例外的	突線採用	多用	多用
突線鈕 2 式~5 式		なし	突線採用	多用	減少

## 2 銅鐸の同範関係

他方、銅鐸には同範関係が多数知られ、石製鑄型を何度も補修しながら複数回の鑄造を行っていたことが、通則の観すらある。難波によれば、進行した範傷の存在から菱環鈕式の段階でも同範関係の存在が推察でき、実際の同範関係は外縁付鈕 1 式から確認できる〔難波 2000〕。古い段階の銅鐸は決して良好な鑄上がりでなく、大きな鑄造不良が生じた場合、鑄込み自体のやり直しが想定でき、同範銅鐸という形で現れてなくとも、鑄型の複数回使用はむしろ通例であった。以後、石製鑄型の扁平鈕式古段階まで高い比率で同範銅鐸が存在する。1 鑄型での製作個数も最大 7 個を数え、正確に算出できないが、1 鑄型あたりの平均鑄造数は銅鐸群によっては優に 2 を超え、武器形青銅器との格差が大きい。同範組比率で比較しても、武器形青銅器では彫り直し可能性例を算入してもようやく 20% に届く程度であるのに対し（表 3）、銅鐸ではこの値が最小値で、最高は 70% を超える（表 4 上段）。

ところが、このような高頻度の同範銅鐸も、扁平鈕式新段階以降激減する。同範製作可能な石製鑄型から、複数回使用が難しい土製鑄型に転換するからに他ならない。使い回しが利き製作の省力化が大きい特性を退けてでも、鑄型の素材転換を図った意図はどこにあったのか。銅鐸鑄造技術の一端である鑄掛けと補刻の展開から、推し量ることができる。これらの出現状況を難波の整理に基づいて整理したのが表 4 下段である。菱環鈕式・外縁付鈕 1 式の段階では、文様鑄出不鮮明な銅鐸が比較的多く、鑄掛けは存在するが少なく範囲も狭い。既述のように、大きな鑄造不良が生じた場合は鑄込み自体をやり直したのである。外縁付鈕 2 式になると、鑄出不鮮明なものは減少し、鑄掛けの多用と広範囲化が認められ、強度を補う円形の足掛かり孔も出現する。そして鑄掛け部分への追加施文として陰陽逆転となる補刻が始まり、扁平鈕式新段階では陰陽逆転のない文様連続を企画した鑄掛けも現れる〔難波 1999・2000 等〕。つまり、外縁付鈕 2 式以降は文様鑄出の要求に応じた技術対応が図られているのである。そして、より鮮明な文様鑄出に適合した技法として、扁平鈕式新段階で土製鑄型が採用され、その延長により太く突線化した文様をもつ突線鈕式の出現も位置づ

けられる [柳浦ほか 2004]。同時に、銅鐸の大型化への途をも開いた技術転換である。

### 3 武器形青銅器と銅鐸の方向性の差異

武器形青銅器は、同範製作可能でありながら、その特性を活用せず、文様鋳出の欲求もほとんどない。いや本来武器形として鋳造後に研ぎ上げられるべき金属器においては、鋳造による陽出文様は邪魔ですらあった。それ故、例外的な陽出文様をもつ銅剣が、研ぎを制限したことによって型式変化の上で大きな転換点に位置した [吉田 2006a・2009]。むしろこの段階、武器形青銅器においては、本来の武器として研ぎ澄まされた金属光沢をより効果的に発揮する技法として、中広形銅矛を中心に幅広の研ぎ分けが駆使されるに到っている。磨き上げられた金属器の輝きこそが、文様に代わる装飾要素として、武器形青銅器には高く意識され続けたのである。

対して銅鐸は、同範品製作可能という技術特性を廃してでも、鮮明な文様を鋳出したいという欲求から土製鋳型を採用した。文様をもった立体的な造形性と音響性を兼ね備えた祭器として創出された銅鐸が、鋳造技術の進展にともない、音響器としての形・造形性よりも、より鮮明な文様を重視する方向に大きく舵を切ったのである。結果、さらなる大型化を招き、音響性を失わざるを得なくなった。これが「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への転換の実質的要因であろう。

## (6) 小結

銅鐸は、当初から祭器としての役割を担うべく登場したのに対し、武器形青銅器は武器として登場しつつも、実用性に基づく武威の観念を伴い、早々に厚みの増大を伴わない身長的大型化という、非実用的な武威強調の方向に変化を始めた。朝鮮半島と同じ取り扱いまで受容していた範囲を超えて東に広がったとき、銅鐸同様に祭器としての使用が求められ、銅剣に関部双孔が付加され、見た目の大型化への欲求はさらに増大された。北部九州でも実用性に基づく佩用が個人の威儀発揚に機能し、祭器化が受容される前提となる。また、各地では受容した青銅器の種類と数量に基づく選択により多様な模倣品が生みだされるなど、青銅器・青銅器文化の在地化が進行する。そして、中期末葉には、北部九州では多種の青銅器を使い分ける分節化を達成し、中四国地方以东では特定の1器種の地域型青銅器を成立させ、地域弥生社会における祭祀の中核をなすに到る。そして、このような地域結合の背後で、本来の機能喪失、見た目の大型化という点で武器形青銅器と銅鐸が同じ変化を辿りながら、武器形青銅器は武器に本来的な金属光沢を強調する方向で祭器化を推進したのに対し、銅鐸は音響効果や金属光沢よりも文様造形性を重視する方向に進むという、方向性の異同を生じていたのである。

## ③……………弥生青銅器祭祀の終焉

中期末葉に地域型青銅器を各地に成立させ、かつ青銅器としても研ぎ分けを施す中広形銅矛や最も精美な横帯分割型銅鐸等の出現をみた後、弥生後期になると青銅器・青銅器文化は終焉に向けた動きを加速させていく。何より、銅剣の多くや近畿型銅戈が中期で製作を停止してしまう [吉田 2011・2012d 等]。後期には、中期末葉の青銅器を一部残す一方で、中期以来の系譜を引く大型青銅

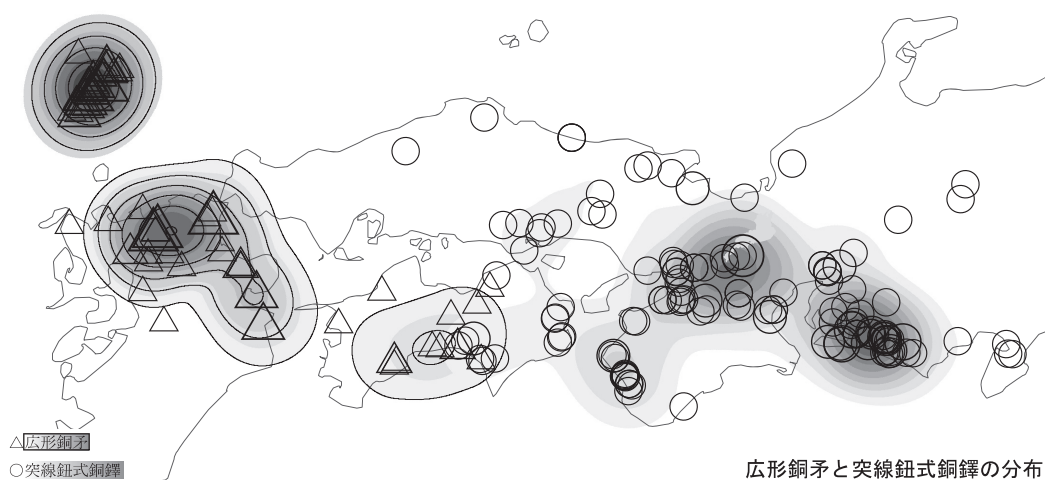


図21 後期の青銅器祭祀の分布

器は、武器形青銅器で広形銅矛と広形銅戈、そして深樋式銅剣、これに近畿式と三遠式が並ぶ突線鈕式銅鐸となり、ほかに各種小型青銅器が現れる。

## (1) 後期の青銅器祭祀

### 1 青銅器祭祀の分布

広形銅矛と突線鈕式銅鐸は、中期末葉の祭祀分布圏対峙の様相を継承し、とりわけ南四国で境界を接して先鋭化する。広形銅矛は中広形銅矛に続いて、九州島から北は対馬の分布密度が一層高まり、東へは豊前・豊後地域から豊予海峡を挟んで四国の南西部に高密度域を形成する。突線鈕式銅鐸は、畿内地域の高密度分布の中心をやや北寄りに移行し、西へは紀伊半島西側から南四国東部地域へと南に偏って密度分布を高める。そして、新たに東海地域に明瞭な高まりが形成される(図21)。近畿式銅鐸も多いが、後期東海地域の地域型青銅器たる三遠式銅鐸の集中によるところが大きい[吉田ほか2008]。そして、瀬戸内海沿岸と山陰から北陸の日本海沿岸に、大型青銅器空白域の広がることが、後期の特徴的かつ重要な事象である。

### 2 対馬の青銅器

武器形青銅器あるいは銅鐸を奉じた弥生後期青銅器文化の地域的展開を具体的に検討できる地域は少ない。後期になって地域型青銅器を成立させる東海地域では、銅鐸の土製模倣も多く、土製品間に系譜関係が想定可能な場合も指摘されるなど[黒沢2012]、三遠式銅鐸あるいは近畿式銅鐸を頂点とする銅鐸祭祀が重層的に展開していた可能性が指摘できる。ただ、埋納された青銅器と地域弥生社会の関係を十分検討するに到っていない。他方、列島青銅器文化の最西北端の対馬では、地理的特性もあって、ある意味特異な青銅器文化を後期に展開させている。

対馬で最も目立って存在するのは中広形・広形の銅矛で、島内120本を超える数が出土している。広形銅矛は、中広形に続いて北部九州最高位の祭祀として埋納される一方で、墳墓出土例(長崎県塔ノ首3号石棺・同木坂5号石棺)が存在し、九州島と異なる取り扱いが認められる[武末1982等]。



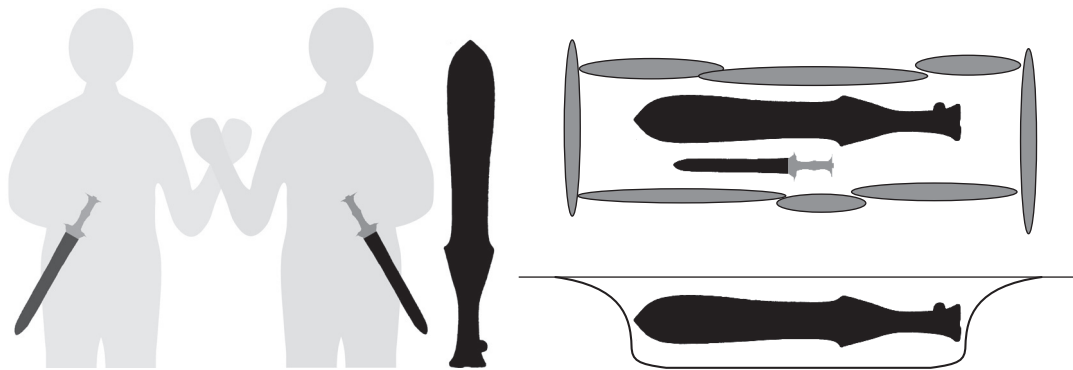


図 22 対馬後期の武器形青銅器

また、細形銅剣や深樋式銅剣が、九州島ではまず行われていない副葬に供され、その中には旧式の銅剣を着柄できるよう再加工してまで、「佩用の剣」に仕立て上げた例も少なくない。そして、「銅材の集合」とされる各種異形青銅器類がまとまって出土する〔下條 1979〕。このように特徴的な対馬の青銅器については、「佩用の剣」であることに拘った銅剣は、北部九州と朝鮮半島南部の間にあって、対外交渉の場面で同じ「佩用の剣」を運びた半島南部との共通性を演出し、その過程で交易者として各種異形青銅器の集積を果たし、北部九州の祭器を奉じて埋納することで北部九州圏への帰属意識を見せつつ、その「奉祭の剣」すら副葬に供することもあるという、複雑な青銅器のあり方(図 22)を復元した〔吉田 2001・2002〕。中期末葉の分節化を継承しながらも、対馬という地理的条件に応じ、北部九州青銅器文化の枠を超えて自らの青銅器文化を構築した対馬海人の強かな独自性がみられるとともに、分節化をピークに終焉に向かう青銅器祭祀・文化の一端を見ることができる。

## (2) 青銅の行方

対馬という最外縁部での変容の一方で、列島西半部においても青銅器祭祀終焉に向かった動きは確実に始まっている。一つには、既に述べた大型青銅器の空白域の広がりである。そしていま一つが、後期になって出現あるいは出土数が著しく増大する小型青銅器である。銅鏡(舶載鏡・小型倣製鏡)、小銅鐸、銅釧、巴形銅器、銅鋤先、銅鏃、筒形銅器、銅貨と多種に及び、九州から関東まで広がり、大型青銅器退潮の一方で小型青銅器盛行を予想させるに十分である。しかも小型青銅器は、埋納と異なり土器他を伴う場合が多く、時期をはじめ集落内での存在形態など、多くの情報を得ることができる。

このような小型青銅器について、まず大型青銅器空白域において一定範囲の具体的状況が窺える事例として、岡山県足守川流域を取り上げる。この地域は、後期になって丘陵部から低地へ進出して広域に居住域を展開させ、一帯を統括する「政治勢力」の存在が想定される榑築弥生墳丘墓出現に結びついていく〔江見ほか 2000, 重根 2002, 伊藤 2006 等〕。最上流域の高塚遺跡で突線鈕 2 式流水文銅鐸の埋納がみられる他、銅鏃、銅鏡、小銅鐸、銅釧、棒状銅製品、貨泉の出土があり、中でも銅鏃の出土遺跡・数が多い。高塚遺跡では、後期前葉に銅鐸と貨泉が埋まった後、後期中葉から後葉に数は少ないが銅鏃と棒状銅製品の出土があり、流域全体でも銅鏃が後期中葉以降増大し、弥生終末から古墳初頭そして古墳前期にまで及ぶ(図 23)。同じ状況は岡山県内では百間川遺跡群でも



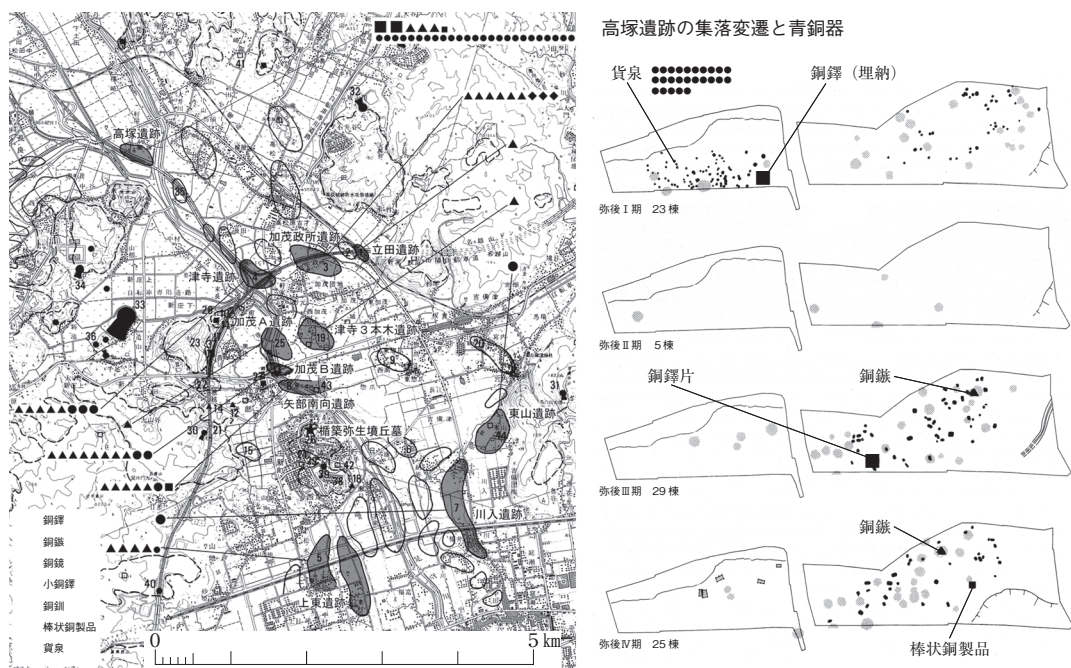


図 23 足守川流域の青銅器

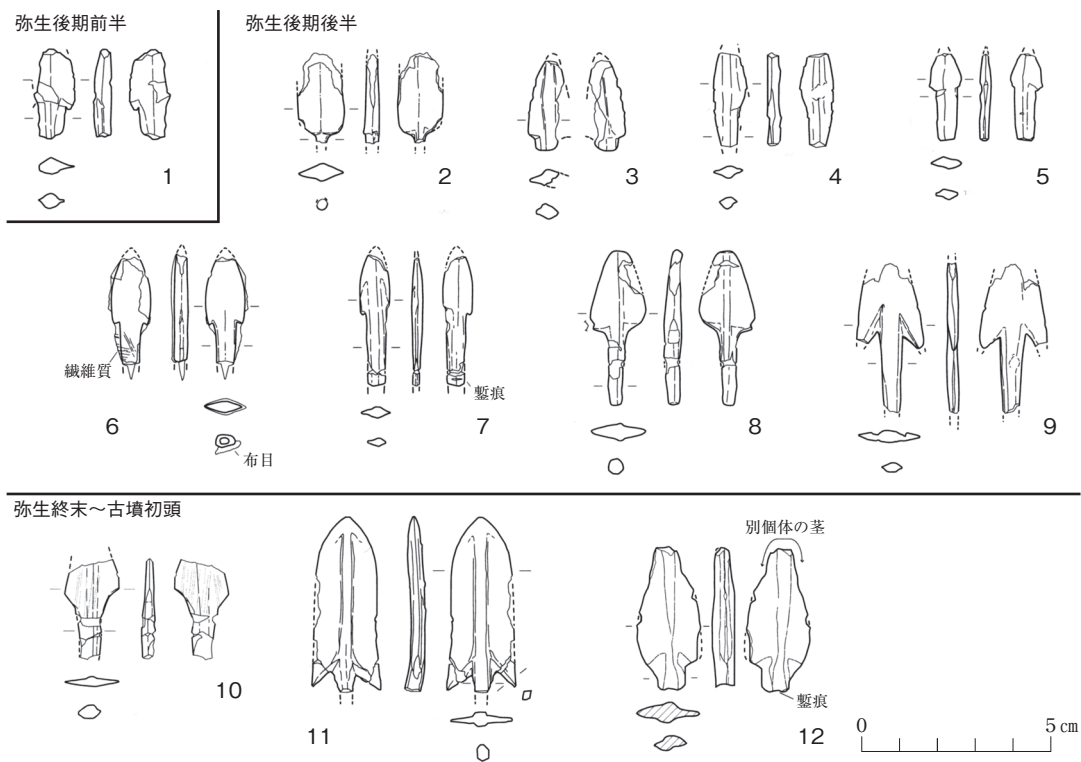


図 24 旧練兵場遺跡出土銅鏃

確認できる [吉田 2006b]。

対岸の香川県旧練兵場遺跡では、60 点を超える大量の銅鏃出土をみるが、やはり後期後半以降特に数を増し、足守川流域や百間川遺跡群では残存状況の良くなかった銅鏃本体の詳細を検討できる個体が多い (図 24)。別個体と連続鑄造した痕跡や鑿痕を残す例 (7・12)、鑄張り除去が不徹底のものがみられるなど、丁寧な仕上げを行っていない個体が多く、形態差も小さくない。報告者は交易拠点として大型集落に集積された状態を示すとみるが [信里編 2011]、製作関連遺物・遺構を確認していないものの、集落内で生産そして廃棄されたとも考えられる [吉田 2010a]。いずれにせよ、後期後半には銅鏃を遺跡内に残す (廃棄する) ほど豊富に保有する事例が現れ、中期までは祭器への充当に専らだった青銅が、銅鏃という、ある意味消費財の素材に充てられるになった姿をみることができる。

さらに他でも、畿内地域では後期に鉄器以上の銅鏃出土を数え、「新式銅鐸を生産し、配布する一方で、鉄器を補完するがごとく、銅を用いた鏃や剣を生産している」との評価がなされている [寺前 2009]。東海地域でも、銅鐸の一方で銅鏃を多く保有する状況があり、有孔銅鏃など儀器的要素をもちつつも、畿内地域と同じく武器としての鏃製作に青銅を充てる社会をみることができ [黒沢 2009 等]。それ以上に、多彩な小型青銅器を保有する社会が後期の中部から関東地方には広がり [柳田編 2012 等]、赤塚は「部族性を表象するアイテム」の素材となった青銅との位置づけを提示する [赤塚 2004]。さらに、より金属素材として先鋭的な扱いを見せるのが、広形銅矛と突線鈕式銅鐸の分布が拮抗する最前線に位置する高知県西分増井遺跡である。後期初頭から中葉にかけて、中広形銅矛や扁平鈕式銅鐸、広形銅戈の破片がまとまって出土し、一部に小型利器転用 (図 1-17) もあり [出原編 2004]、かつて祭器として機能した青銅器を、自らの手で青銅素材として破碎した可能性すらある。

以上のように、大型青銅祭器を既に保有しない地域、なお保有する地域のいずれにおいても、青銅という素材が祭器のみに独占されるのではなく、小型青銅器の原料に解放され、地域によっては、入手可能量に応じて、銅鏃など消費性の高い器物素材に転換していく状況を看取できる。とくに、後期後半以降、地域・量において範囲を拡大し、大型青銅祭器と祭祀の社会的価値を相対的に低下させたと考えられる。なおそのような動向も、各地域単位で進行し、中には小型青銅器獲得に向かわなかった鳥取県妻木晩田遺跡や高知県田村遺跡等も存在している。

### (3) 銅鏡の選択

小型青銅器盛行の一方で広形銅矛と突線鈕式銅鐸は、少なくとも古墳時代に降ることが特定できた青銅祭器埋納が存在しないこと、古墳という葬送儀礼の新たな祭場に弥生青銅祭器が存在しないことから、古墳成立という時代転換の前にあるいは中で最後の埋納を終え、新たな祭器を作り出すことも、再び取り出すこともなくなり終焉を迎えていった。ただそれ以上に時期を限定していくことは難しく、直接的に時期を示す伴出遺物を伴う埋納例を得るか、さらなる状況証拠を積み上げていくしかない。

他方、弥生青銅器の終焉について、武器形青銅器と銅鐸という弥生青銅祭器が、なぜ器物として古墳時代に継承されなかったのか。裏を返せば、なぜ銅鏡のみが弥生時代から古墳時代にかけて青

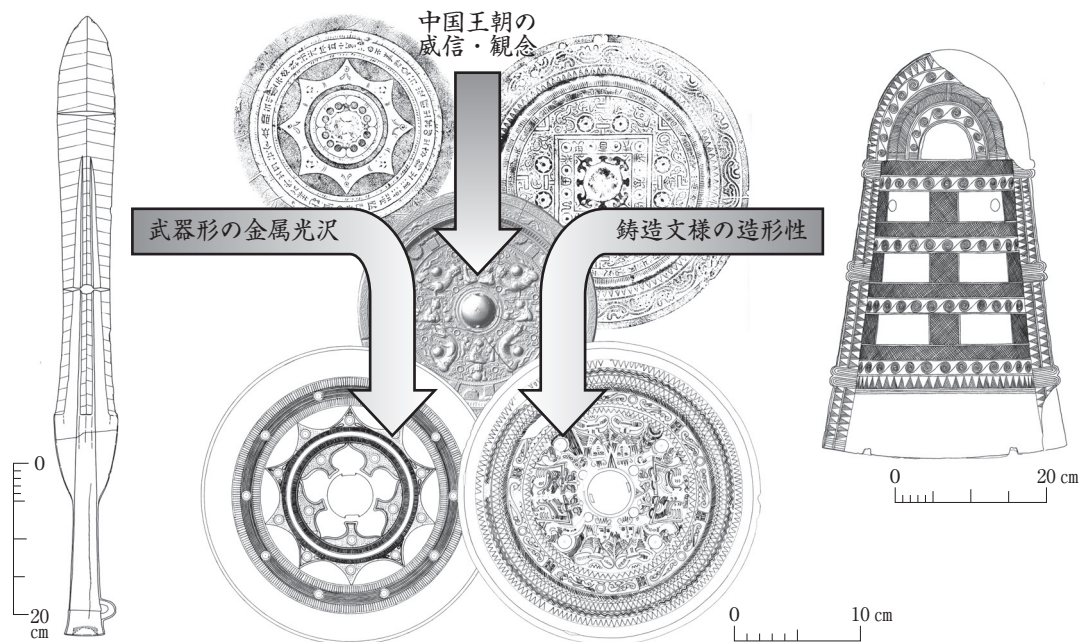


図25 銅鏡に継承された弥生青銅器の二相

銅器として継続し、かつ古墳の葬送儀礼において重要な役割を果たしたのか、弥生青銅器の意味を確認する上で一考しておかなければならない。

先に、武器形青銅祭器は、磨き上げられた金属光沢こそが祭器たる所以とし、そのピークを研ぎ分け技法を駆使した中広形銅矛にみた。すると、研磨の明らかな退行をみる広形銅矛は、祭器形態として終末型式に相応しい。一方の銅鐸は、磨き上げられた金属光沢でなく、大きさも含めた鮮明な鑄造文様をもった造形性の高さに祭器たる所以をみいだした。武器形青銅器と銅鐸は、言わば、相反する金属特性に依拠する途を、中期末葉のピークの後に降り始めたのである。青銅祭器を奉じた地域間の統合が果たせたとしても、異なる性格の青銅器いずれかを選択することは難しい。そのとき、両者の性格を包含可能であったのが銅鏡である。鏡面と鏡背の二面をもつ銅鏡は、鏡面に武器形青銅器に共通する金属光沢を、鏡背は銅鐸に求められていた鑄造文様の造形性を継承できた。しかも、中期末葉の中国王朝との直接・間接の交渉により舶載された銅鏡は、中国王朝の威信や鏡背に鑄出された宇宙観・宗教観に基づいて、北部九州における青銅器分節化における最上位を入手当初から占めていた。このように価値を複合的に保持できた銅鏡であったからこそ、後期を通じて、石製鑄型を主とした小型倣製鏡製作や鏡片保有など、銅鏡に基づく重層的な価値体系を作り出そうとした。しかし、弥生時代には舶載鏡に並ぶ倣製鏡製作は、とりわけ石製鑄型による技術伝統の元では果たせず、魏晉王朝の威信を帯びた新たな舶載鏡とともに、舶載鏡と並ぶほどの大きさと文様を達成した精製大型倣製鏡を待たねばならなかった（図25）。葬送儀礼という新たな祭祀舞台として前方後円墳が創出されるなかで、弥生青銅祭器の性格をも引き継ぐことができた銅鏡が、新たな「祭器」として古墳祭祀の中で重要な役割を担っていくことになったのである。



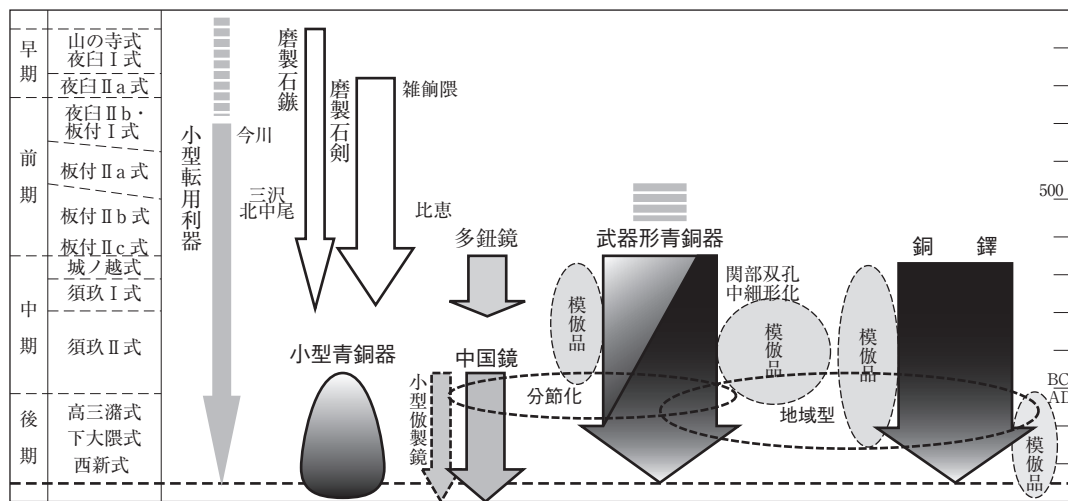


図 26 日本列島青銅器文化の階梯

#### (4) 小結

青銅器祭祀の終焉は、中期末葉で製作を停止する青銅祭器が現れることに始まり、後期には広形銅矛と突線鈕式銅鐸が大型青銅祭器として残る程度となる。これらの最終的埋納時期を特定することはなお難しいが、古墳成立を前に、祭器の役割を終えていたことは間違いない。祭器に独占されていた青銅が、多様な器物素材に解放されたことにより、後期後半以降とくに増大する各種小型青銅器が、残る大型青銅祭器の価値を一層相対的低下させていった。このような青銅器そのものの価値体系の転換が地域毎に進行し、新たな地域統合を象徴する祭祀は、青銅祭器でなく、前方後円墳という舞台を完備した葬送儀礼に交替していかなければならなかった。ただし、武器形と銅鐸という大型弥生青銅器の性格は、金属光沢と複雑な文様性を両面に具備した銅鏡に継承されることによって、前方後円墳祭祀に昇華されたのである。

#### まとめ

日本列島の青銅器文化の展開を改めて整理してみると、前段の青銅器不在の弥生時代の長さと、対する出現後のドラスティックな変化を確認することができる（図 26）。

日本列島における本格的な青銅器文化は、弥生時代中期初頭に開始し、その前に青銅器文化を伴わない弥生時代が長期間続いた。北部九州では、青銅器不在の間に武器形石製品を既に受容し、中期初頭に朝鮮半島から武器形青銅器を、その取り扱いを伴ってスムーズに導入した。ところが、銅鐸の登場は、武器形青銅器における武器形石製品のようなプロトタイプを欠き唐突で、しかも当初から祭器としての登場であった。ここには、北部九州の武器形青銅器とは異なる祭器を求めた山陰から北陸、近畿そして東海に及ぶ広域が連動した積極的意図の存在を窺える。こうした登場前段の差違を起源として、以後の弥生青銅器文化の二つの潮流が出現当初から形成されたのである。



祭器として一貫した銅鐸に対し、武器形青銅器も実用性に基づく武威の強調に進み、早々に厚みの増大を伴わない身長的大型化を遂げ、東へと分布を広げていく中で、祭器としての使用に伴って銅剣関部双孔が付加される。そして、各地では受容した青銅器の種類と数量に基づく選択から多様な模倣品が生みだされるなど在地化が進行し、中期末葉には北部九州では多種の青銅器を使い分ける分節化を達成するのに対し、中四国地方以東では 1 種に特化して地域型青銅器を成立させる。このように地域性が分立するとともに、青銅祭器の性格も、本来の機能喪失と見た目の大型化という点では一致しながら、武器形青銅器が金属光沢の強調へ、銅鐸は文様造形性重視へと乖離し、より大きな統合へ向かわなかった。

そして、中期末葉に青銅器祭祀を早くも停止する地域が広がり、後期に広形銅矛と突線鈕式銅鐸の大型青銅祭器が残る一方で、多様な小型青銅器に青銅素材が解放されたことにより、青銅祭器の価値体系は相対的に低下していった。そして、より広域の新たな地域統合を象徴する祭祀が前方後円墳という舞台を完備した葬送儀礼に交替していく中で弥生青銅祭器は役割を終え、武器形青銅器の金属光沢と銅鐸の複雑な文様性を両面に具備した銅鏡が新たな「祭器」として、前方後円墳祭祀の中に継承昇華されていったのである。

#### 引用・参考文献

- 赤塚次郎 2004「東日本からの青銅器論」『考古学フォーラム』16, 2-9 頁
- 熱田貴保・伊藤徳広・宮澤明久・守岡正司・守岡利栄 2007「青銅器模倣品出土地集成」『古代文化研究』第 15 号, 1-25 頁, 島根県古代文化センター
- 天本洋一 1994「北部九州の鐸形土製品について」『佐賀考古』第 1 号, 55-67 頁
- 井 英明編 2006『馬渡・東ヶ浦遺跡 1』古賀市文化財調査報告書第 40 集
- 池ノ上 宏編 2002『津屋崎町内遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第 19 集
- 石井龍彦編 2005『井ノ山遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集
- 石川日出志 1992「N. G. マンロー資料中の「有孔石剣」と「石包丁」」『考古学雑誌』第 78 巻第 1 号, 118-125 頁
- 伊藤 実 2006「瀬戸内の広域散在型集落—広島湾岸・西条盆地・足守川下流域を中心に—」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』, 63-78 頁, 日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会
- 岩永省三 1986「剣形祭器」『弥生文化の研究』第 6 巻 道具と技術Ⅱ, 106-112 頁, 雄山閣
- 岩永省三 1994「日本列島産青銅武器類出現の考古学的意義」『古文化談叢』第 33 集, 37-60 頁
- 江見正己・弘田和司・平井泰男・柴田英樹・田坂佳子・築地由行・井上 弘編 2000『高塚遺跡・三手遺跡 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 150
- 扇崎 由編 2005『南方（済生会）遺跡—木器編—』岡山市教育委員会
- 大野勝美 2004「銅鐸形土製品考—銅鐸祭祀の東限を考える—」『設立 20 周年記念論文集』, 163-184 頁, 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岡林孝作・水野敏典編 2008『ホケノ山古墳の研究』榎原考古学研究所研究成果第 10 冊
- 岡本孝之 1999「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』84 巻第 3 号, 1-54 頁
- 奥井哲秀・横山成己編 2003『東奈良』, 茨木市教育委員会
- 落合昭久編 2005『田和山遺跡』松江市文化財調査報告書第 99 集
- 角田徳幸・山崎 修編 2002『加茂岩倉遺跡』, 島根県教育委員会・加茂町教育委員会
- 神尾恵一 2012「銅鐸形土製品祭祀の研究」『古文化談叢』第 67 集, 177-221 頁
- 唐津湾周辺遺跡調査委員会編 1982『末盧國』, 六興出版
- 金 永培・安 承周 1975「扶餘松菊里遼寧式銅剣出土石棺墓」『百済研究』7・8 合輯, 7-29 頁
- 金 東一 2012「青銅短剣の剣柄と剣身の組み立て方法について」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』6 号, 68-74 頁
- 黒沢 浩 2009「中部の弥生青銅器・概観」『中部の弥生時代研究』, 203-213 頁, 中部の弥生時代研究刊行委員会

- 
- 黒沢 浩 2012「銅鐸の周辺—銅鐸形土製品をめぐる—」『みずほ』第43号, 49-78頁
- 後藤 直 1991「日本の初期青銅器—弥生前期末以前」『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』, 106-108頁, 六興出版
- 後藤 直 1996「霊岩出土鑄型の位置」『東北アジアの考古学』第二〔樺域〕, 149-203頁, 東北亜細亜考古学研究会
- 酒井仁夫編 1981『今川遺跡』津屋崎町埋蔵文化財調査報告書第4集
- 境 靖紀 2004「多樋銅剣の系譜と意味」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』, 175-192頁, 小田富士雄先生退職記念事業会
- 佐藤浩司編 1998『永犬丸遺跡群2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第216集
- 設楽博己 2009「東日本系土器の西方への影響」『弥生時代の考古学』第2巻 弥生文化誕生, 188-203頁, 同成社
- 重根弘和 2002「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』上巻, 343-362頁, 古代吉備研究会
- 柴田昌児 2009「松山平野における弥生社会の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集, 197-230頁
- 下條信行 1976「石戈論」『史淵』第113号, 211-253頁
- 下條信行 1979「南北市糴考—弥生時代対馬舶載朝鮮製青銅器の意味—」『史淵』第116号, 175-210頁
- 下條信行 1982a「武器形石製品の性格—石戈再論—」『平安博物館研究紀要』第7輯, 1-33頁
- 下條信行 1982b「石矛の提唱—木葉形磨製石製武器について—」『賀川光夫先生還暦記念論集』, 83-94頁, 賀川光夫先生還暦記念会
- 下條信行 1991「西日本 第一期の石剣・石鏃」『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』, 69-75頁, 六興出版
- 庄田慎矢・寺前直人 2012「特輯『東北アジアの武器形石器』に寄せて」『古代文化』第64巻第1号, 66-68頁
- 孫 駿鎬／庄田慎矢訳「朝鮮半島の銅剣模倣石剣」『古代文化』第64巻第1号, 82-91頁
- 高山京子編 2012『小倉城二ノ丸家老屋敷跡2』北九州市文化財調査報告書第126集
- 武末純一 1982「埋納銅矛論」『古文化談叢』第9集, 119-156頁
- 武末純一 2004「弥生時代前半期の暦年代—九州北部と朝鮮半島南部の併行関係から考える—」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』, 129-156頁, 小田富士雄先生退職記念事業会
- 武末純一 2011「弥生時代前半期の暦年代再論」『AMS年代と考古学』, 89-130頁, 学生社
- 武田光正編 2007『尾崎・天神遺跡Ⅴ, 金丸遺跡Ⅱ』遠賀町文化財調査報告書第18集
- 田崎博之・小畑弘己 1991「第25次調査地点」『比恵遺跡群(10)』, 67-167頁, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集
- 田崎博之 2006「四国・瀬戸内における弥生集落—愛媛県文京遺跡の密集型大規模集落, 北部九州との比較—」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』, 17-44頁, 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 立岩遺跡調査委員会編 1977『立岩遺蹟』, 河出書房新社
- 種定淳介 1990「銅剣形石剣試論(上)・(下)」『考古学研究』第36巻第4号・第39巻第1号, 21-52頁・29-56頁
- 種定淳介 1992「銅剣形石剣Ⅰ式の成立とその意義」『究班—埋蔵文化財研究会15周年記念論文集—』, 85-103頁, 埋蔵文化財研究会
- 出原恵三編 2004『西分増井遺跡Ⅱ』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集
- 寺前直人 2009「銅鐸と武器形青銅器—畿内弥生社会の変質過程—」『考古学ジャーナル』No.590, 26-29頁
- 寺前直人 2010『武器と弥生社会』, 大阪大学出版会
- 寺前直人 2012「日本列島における青銅製武器模倣石器の出現過程」『古代文化』第64巻第1号, 92-104頁
- 富樫雅彦・徳澤啓一 1995「小銅鐸の基礎的研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第11輯, 25-70頁
- 中島直幸・田島龍太編 1982『葉畑遺跡』唐津市文化財調査報告第5集
- 中村 豊 2004「結晶片岩製石棒と有柄式磨製石剣」『季刊考古学』第86号, 36-39頁, 雄山閣
- 中村 豊 2007「縄文—弥生移行期的大型石棒祭祀」『縄文時代の考古学』第11巻 心と信仰—宗教的観念と社会秩序—, 283-294頁, 同成社
- 難波洋三 1999「近年の銅鐸研究の動向」『徹底討論 銅鐸と邪馬台国』283-294頁, 銅鐸博物館(野洲町立歴史民俗資料館)
- 難波洋三 2000「同範銅鐸の展開」『シルクロード学研究叢書』3, 11-30頁
- 難波洋三 2006「朝日遺跡出土の銅鐸鑄型と菱環鈕式銅鐸」『埋蔵文化財調査報告54 朝日遺跡(第13・14・15次)』189-206頁, 名古屋市文化財調査報告69
- 野澤則幸・伊藤正人編 2006『埋蔵文化財調査報告54 朝日遺跡(第13・14・15次)』名古屋市文化財調査報告69
- 信里芳紀編 2011『旧練兵場遺跡Ⅱ(第19次調査)』, 香川県教育委員会
-

- 
- 馬場伸一郎 2008「武器形石製品と弥生中期栗林文化」『赤い土器のクニ』の考古学, 111-163頁, 雄山閣
- 林田和人編 2005『八ノ坪遺跡Ⅰ』本文編, 熊本市教育委員会
- 春成秀爾 1984「最古の銅鐸」『考古学雑誌』第70巻第1号, 29-51頁
- 春成秀爾編 2009『国立歴史民俗博物館資料図録6 弥生青銅器コレクション』, 国立歴史民俗博物館
- 比田井克仁 2001「関東における「小銅鐸」祭祀について」『考古学雑誌』第86巻第2号, 40-68頁
- 広瀬和雄 1998「西瀬戸内の弥生都市・文京遺跡」『考古学研究』第45巻第1号, 9-13頁
- 廣田和穂編 2012『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
- 福島日出海 1988「福岡県嘉穂郡嘉穂町原田遺跡出土の小銅鐸について」『考古学雑誌』第73巻第4号, 66-74頁
- 福永伸哉・杉井 健編 1996『雪野山古墳の研究』, 八日市市教育委員会
- 藤田三郎・豆谷和之監修 2009『唐古・鍵遺跡Ⅰ』田原本町文化財調査報告書第5集
- 堀苑孝志・天野直子・入江俊行 2005『雑餉隈遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第868集
- 町田勝則 1997a「続・稀少なる品々―栗林文化―」『長野県考古学会会誌』第69号, 33-43頁
- 町田勝則 1997b「稀少なる品々―信州弥生文化にみる特殊遺物の変遷―」『人間・遺跡・遺物3―麻生優先生退官記念論文集』, 370-392頁, 発掘者談話会
- 松本岩雄・足立克己編 1996『出雲神庭荒神谷遺跡』, 鳥根県教育委員会
- 村岡和雄編 1998『宮ヶ久保遺跡』阿東町埋蔵文化財報告第1集
- 森田克行 2002「最古の銅鐸をめぐって―東奈良銅鐸の型式学的研究―」『究班Ⅱ 埋蔵文化財研究会25周年記念論文集』, 163-179頁, 25周年記念論文集編集委員会
- 柳浦俊一・岩永省三・吉田 広 2004『青銅器の同范関係調査報告書Ⅰ―武器形青銅器―』鳥根県古代文化センター調査研究報告書19
- 柳田康雄 2003「磨製石鎌」『伯耆社遺跡』98-107頁, 春日市文化財調査報告書第35集
- 柳田康雄編 2012『東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究』, 雄山閣
- 山崎頼人 2012「付編 三沢北中尾遺跡2 b区127号土坑出土銅斧について」『三沢遺跡確認調査』, 59-62頁, 小郡市文化財調査報告書第266集
- 吉田 広 1997「銅矛形石矛について」『みずほ』第22号, 38-47頁
- 吉田 広編 2001『弥生時代の武器形青銅器』考古学資料集21
- 吉田 広 2001「対馬海人の剣」『九州考古学』第75号, 171-194頁
- 吉田 広 2002「武器形青銅器にみる帰属意識」『考古学研究』第49巻第3号, 5-19頁
- 吉田 広 2004「武器形青銅器の祭祀」『季刊考古学』第86号, 54-58頁
- 吉田 広 2005「福田木ノ宗山の遺跡と銅剣・銅戈―広島武器形青銅器・補遺―」『考古論集―川越哲志先生退官記念論文集―』, 329-346頁, 川越哲志先生退官記念事業会
- 吉田 広 2006a「銅剣の陽出文様」『喜谷美宜先生古稀記念論集』, 91-100頁, 喜谷美宜先生古稀記念論集刊行会
- 吉田 広 2006b「四国・瀬戸内地域の集落出土青銅器」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』, 237-262頁, 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 吉田 広 2008「日本列島における武器形青銅器の鑄造開始年代」『新弥生時代のはじまり』第3巻 青銅器と鉄器の系譜と年代, 39-54頁, 雄山閣
- 吉田 広・増田浩太・山口欧志 2008「青銅器の対立構造」『弥生時代の考古学』第7巻 儀礼と権力, 99-111頁, 同成社
- 吉田 広 2009「青銅器の形態と技術―武器形青銅器を中心に―」『弥生時代の考古学』第6巻 弥生社会のハードウェア, 53-63頁, 同成社
- 吉田 広 2010a『銅鐸分布圏における武器形青銅器の実相に関する包括的研究』平成20年度・平成21年度愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費研究成果報告書
- 吉田 広 2010b「弥生時代小型青銅利器論―山口県井ノ山遺跡出土青銅器から―」『山口考古』第30号, 1-26頁
- 吉田 広 2011「武器形祭器」『講座 日本の考古学』6 弥生時代(下), 187-222頁, 青木書店
- 吉田 広 2012a「柳沢遺跡出土銅戈の位置づけ」『中野市柳沢遺跡』, 202-211頁, 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
- 吉田 広 2012b「出雲青銅器文化の重層的検討」『古代出雲における青銅器文化の研究』, 7-23頁, 古代文化センターテーマ研究報告書, 鳥根県古代文化センター
- 吉田 広 2012c「小倉城二ノ丸家老屋敷跡出土の銅剣」『小倉城二ノ丸家老屋敷跡2』, 197-216頁, 北九州市文化財調査報告書第126集
-

吉田 広 2012d「近畿における銅戈の展開」『菟原Ⅱ—森岡秀人さん還暦記念論文集—』, 229-238 頁, 菟原刊行会  
力武卓治・横山邦継編 1996『吉武遺跡群Ⅷ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 461 集

## 挿図出典

図 1: [吉田 2010b] (1. 韓国松菊里, 2・3. 福岡県今川, 4. 山口県井ノ山, 5. 佐賀県釈迦寺, 6. 福岡県東入部, 7. 福岡県道蔵, 8. 佐賀県土生, 9. 高知県田村, 10. 奈良県唐古・鍵, 11. 岡山県高松田中, 12. 岡山県南方蓮田, 13. 愛媛県久米高畑, 14. 香川県空港跡地, 15. 広島県大槓 3 号, 16. 大阪府久宝寺, 17. 高知県西分増井, 18. 群馬県三ツ俣)

図 2: [山崎 2012]

図 3: [堀苑ほか 2005]

図 4: [力武・横山編 1996]

図 5: [井編 2006]

図 6: 1. 韓国慶尚北道入室里 [春成 1984], 2. 福岡県原田 [福島 1988], 3. 福岡県松本 [佐藤編 1998], 4. 熊本県八ノ坪 [林田編 2005], 5. 福岡県勝浦高原 [池ノ上編 2002], 6. 愛知県朝日 [野澤・伊藤編 2006], 7. 出土地不詳東博 35509 号 [春成 1984], 8. 鳥根県荒神谷 5 号 [松本・足立編 1996], 9. 兵庫県中川原 [春成 1984], 10. 大阪府東奈良 [奥井・横山編 2003]

図 7: 1. 愛媛県西番掛 1 号, 2. 香川県藤の谷 3 号, 3. 香川県藤の谷 1 号, 4. 高知県八田岩滝, 5. 香川県藤の谷 2 号, 6. 鳥根県伝竹矢町, 7. 愛媛県西番掛 2 号, 8. 伝鳥根県, 9. 福岡県金丸, 10. 福岡県小倉城二ノ丸家老屋敷跡, 11. 愛媛県扇田, 12. 高知県新莊波介 1 号, 13. 兵庫県古津路 10 号, 14. 広島県福田木ノ宗山, 15. 鳥根県荒神谷 B 11 号, 16. 兵庫県正法寺山, 17. 岡山県由加山 3 号, 18. 徳島県東寺, 19. 福岡県須玖岡本 D, 20. 福岡県高三瀨東畑, 21. 広島県盾石, 22. 長野県箭塚, 23. 福岡県今宿横浜, 24. 愛知県志断味, 25. 長崎県住吉神社旧蔵, 26. 大阪府加美, 27. 岡山県百間川原尾島, 28. 鳥取県長瀬高浜 9 [武田編 2007], 10 [高山編 2012], 他 [吉田編 2001]

図 9: [高山編 2012]・[武田編 2007]

図 11: 1～3. 山口県宮ヶ久保 [村岡編 1998], 4. 岡山県南方 [扇崎編 2005]

図 12: 1. 福岡県金丸 [武田編 2007]

図 13: 1. 長野県北裏 [馬場 2008], 2. 長野県宮渕本村 [馬場 2008], 3. 長野県笠倉 [馬場 2008]

図 15: 1～5. 岡山県南方 [扇崎編 2005]

図 16: 1・2. 奈良県唐古・鍵 [藤田・豆谷ほか 2009]

図 17・21: [吉田ほか 2008]

図 19: 愛媛県伝道後樋又 [吉田編 2001]

図 20: [吉田編 2001]

図 24: [信里編 2011]

図 25: 銅矛. 佐賀県検見谷 11 号 [吉田編 2001], 銅鏡. 福岡県立岩堀田 10 号甕棺 5 号鏡 [立岩遺跡調査委員会編 1977], 佐賀県桜馬場 [唐津湾周辺遺跡調査委員会編 1982], 奈良県ホケノ山古墳 [岡林・水野編 2008], 滋賀県雪野山古墳 1 号鏡・4 号鏡 [福永・杉井編 1996], 銅鐸. 兵庫県生駒 [春成編 2009]

(愛媛大学ミュージアム, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012 年 12 月 7 日受付, 2013 年 1 月 25 日審査終了)



## Development and Features of the Yayoi Bronze Ritual Implements

YOSHIDA Hiroshi

After starting rice cultivation, people used weapon-shaped stone tools and diverted small sharp-edged bronze implements to different purposes for a long time, while there were no metal implements. Following this preliminary stage, weapon-shaped bronze implements appeared in the beginning of the Middle Yayoi period. On the other hand, skipping the preliminary stage, small bronze bells appeared in northern Kyushu and bronze bells in Kinki in the first half of the Middle Yayoi period. In other words, the area around Kinki consciously adopted bronze bells rather than weapon-shaped bronze implements. Having a ceremonial nature as a sounder, the bronze bells came to be used for nothing but ritual purposes. In contrast, the weapon-shaped bronze implements came to mix two purposes: practical utility as a weapon and dignity demonstration as a military power. While various kinds of imitations were appearing in the periphery and outside of northern Kyushu, however, the bronze implements as a whole also came to be used in rituals, such as bronze swords with two holes in the joint part. In northern Kyushu as well, people started to wear swords not only for practical purposes but also for demonstration of personal dignity, which led to the acceptance of bronze swords as ritual implements. Respective areas promoted the development of bronze tools into ritual implements in their own ways while a wide variety of imitations appeared depending on the choice of type and amount of bronze implements each local society acquired. Eventually, in the end of the Middle Yayoi period, a variety of bronze tools fell into different categories with different roles in northern Kyushu, which established a bronze system centering on medium broad bronze spearheads. On the other hand, focusing on particular types of bronze implements, each area in Chugoku/Shikoku region and eastward developed its own local bronze tools. Although both weapon-shaped bronze implements and bronze bells lost their original purposes and became larger in size, they accented different features of the material; whereas weapon-shaped bronze implements got to emphasize the function of dignity demonstration with metallic luster, bronze bells attached importance to the creation of patterns rather than acoustics and metallic luster. While this difference was inherited later, more and more areas stopped using bronze ritual implements, and bronze came to be used not only for ritual implements but also for other small tools. Then, the Yayoi bronze ritual implements disappeared, newly replaced by the Kofun ritual implements. Carrying the prestige of Chinese dynasties, bronze mirrors were adopted as the Kofun

---

ritual implements while inheriting both of the accented features of the Yayoi ritual implements, metallic luster and pattern creation.

Key words: Yayoi bronze implements, Ritual implements, Weapon-shaped bronze implements, Bronze bells, Imitation, Regions